
第9天魔王

ランチュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第9天魔王

【Nコード】

N4608H

【作者名】

ランチュウ

【あらすじ】

九代目魔王・ダークラが、妖魔皇帝・ラグリアスや、レプティリアン頭領・リュウハク達と、馬鹿メインで進める摩訶不思議かつ意味不明な物語だ！！

第1話・魔王、動く

これは三国志からすれば未来であり、戦国からみても未来の話。トルコのカッパドキアに9代目の魔王・ダークラとやらがいた。

六代目は皆も知っている、マール様である。・・・信長じゃないのかって？それは聞かないこと。

ある日ダークラは良からぬことを企んでいた。

ダークラ

「なあ、オメガよ・・・」

オメガ

「何ですか、ダークラ様」

ダークラ

「ヨーロッパ地方のメルヘンを破壊しつくそうぞ」

オメガ

「は、はいいいい！?!?」

オメガは愕然とした。この人は何を言ってるのかと・・・。

ダークラ

「魔王として、棚ぼた的に王子や王女と結婚しとるやつが気に入らん。だから、そんな奴らに絶望を見せなければならん」

こうしてダークラは、ヨーロッパに絶望を見せるために出陣した。

第2話・ダークラマジック

ダークラは手始めに、池の近くにいた王子に話しかけた。

ダークラ

「君、イケメンだね。きっといい人と結婚できるよW」

王子

「まあ、皆によく言われますけど。あなたは誰ですか？」

ダークラ

「君に絶望を見せに来たんだよ!!!」

そういうと、ダークラはいきなり王子に魔法をかけた!!!!

王子

「げえっ！僕の体がカエルに!!!!」

ダークラ

「ははは、君みたいなナルシストはその姿がお似合いだな」

王子

「別にナルシじゃないし……。そういうダークラは顔に自信がないのか？」

ダークラは覆面のようなもので顔をおおっていた……。

ダークラ

「これは……過去と決別するためにつけてるのさ。ところでナレーター、なんで『王子』が『カエル王子』にならんのだ……？」

えっ？そんなの知らないよ。

ダークラ

「ええい、口答えするやつあ、これでも喰らえ！！！」

あああああああ！！

ダークラ

「と、いうわけで君はカエル王子だ」

カエル王子

「わかりました・・・」

カエル王子はとぼとぼと池の中に消えていった。

ダークラ

「さーて、次はどうすっかな？」

ダークラは去っていった。ダークラは、自分のかけた呪いがあ
る行為で解けてしまう事にまだ気づいていなかった・・・。

その頃、ダークラの馬鹿な行為に頭にきている者がいた。

妖魔皇帝・ラグリアス

ラグリアス

「最近、ダークラとやらが暴走している。お前の力で倒してこい」

オオカミオ

「かしこまりました、ラグリアス陛下」

オオカミオはヨーロッパ地方へ旅に出た。まさか、家畜や小娘にフルボッコにされることになるとも知らずに・・・。

第3話・まさかの善行

ダークラはいろいろやらかした。王女を白鳥にしたり、アリスを不思議の国へいざなったりと、酷いケースもあれば、川に肉を落とすくらいで済んだというケースもあった。

ダークラ

「夢なんぞ、破壊してくれる」
しかし、あるときダークラはとんでもない失態をやらかした。

ある日、ダークラが泉を訪れると、一人の男が立っていた。欲針奪男というやつだった。

ダークラ

「どうしたんだ、君？」

欲針

「ここに斧を落としたら、変な金の斧持って出てきて、それが欲しいと思ったら、キレてどっか行ってしまってたな」

ダークラ

「そりゃ酷いやつだ。それは新手のぼったくりかもしれんぞ」

欲針

「あなたは第9天魔王とやらなのですから、変な女から斧を取り返してくださいよ」

ダークラ

「いいや、自分で潜って取り戻せ」

そういうと、ダークラは欲針を泉へ突き落とした。

欲針

「あゝあゝあゝー！！！！」

するとその直後に泉から女が現れた。手には何だか優しそうな男を抱えている。

ダークラ

「貴様、欲針に何をした！？」

女神

「あなたが落としたのは、この正義丸ですか？」

ダークラ

「いや……。欲針っていう、がめつい奴ですけど？」

女神

「あなたは正直者なので、この正義丸を差し上げましょう」

そういつて正義丸を於いていくと、女神は泉の中へ消えていった。

ダークラ

「まさかお前、欲針……。だよな？」

正義丸

「それはもう、過去の話。私はこれから正義のために尽くします！」

そういうと、正義丸は去っていった。

ダークラ

「まさか、俺……。善いことしたのか！？ いや、一人の人生を狂わせたと思えば、何とも無いな。うんうん」

ダークラはそういつて、またどこかへ行ってしまった・・・。

その頃、オオカミオは美についてつぶやいていた。

オオカミオ

「何だか、今日は家に対して美を見出だしたいですねえ」

後にこの考えが幼い命を救う！？

第4話・欠陥住宅

オオカミオが歩いていると、藁の家を見つけた。オオカミオは沈黙した。そして、その家を訪ねた。すると、長男豚がいた。

長男豚

「げえっ！オオカミ！！もうだめや、喰われるわ・・・」

オオカミオ

「こんな家に住んでいたら、火事的时候可以に大変なことになりますよ！？」

オオカミオはそういうと、藁の家を破壊した。

長男豚

「わけわからんオオカミオやな」

長男豚は次男豚のいる木の家に逃げ込んだ。

次男豚

「兄さん、オオカミのいう通りです。兄さんの家が火事になったら、それこそ兄さんは焼豚です」

すると、またオオカミオがやってきた。

長男豚

「また来おったわ。お前の家、大丈夫？」

次男豚

「木の家でも、防火対策はバッチリです」

すると、オオカミオはこう言った。

オオカミオ

「防火対策していても、白蟻にやられては意味ありませんよ」

オオカミオは木の家を壊しはじめた。

長男豚

「バンパイアと対抗できる種族って、ナルシなんか？」

次男豚

「こうなったら、弟の家に逃げるしかありませんね」

二匹は、大急ぎで三男豚の家へ逃げた。

三男豚

「あれ、どうしたの兄ちゃん達？なんか、オオカミを見たような顔になってるよ？」

長男豚

「ホンマにオオカミに遭遇したんねん」

次男豚

「弟のレンガの家なら大丈夫でしょう」

すると、やっぱりまた現れたオオカミオ。

オオカミオ

「一応オオカミですので、匂いをたどって来たんですよ」

三匹の子豚はいそいで窓やドアの鍵を閉めた。

オオカミオ

「あれ、なんで鍵を閉めてるんです？」

長男豚

「お前、わいらを喰おう思っ取るやろ」

オオカミオ

「食う・・・なんて、私はそんなえげつない行為はいたしませんよ？」

三男豚

「釜戸で湯でも沸かしておこう」

次男豚

「さすがにこの家は何とも無いですよね？」

オオカミオ

「私は家に美を見出だそうとしているのです」

オオカミオはレンガの家を叩き始めた。

長男豚

「な、何しとるんや、あいつ」

すると、オオカミオの形相が険しくなった。そして、ドアを蹴り飛ばした！！

三男豚

「普通、煙突から入るものだろ！？」

オオカミオ

「早くこの家から出なさい！もうじき崩れます！！」

長男豚

「なに言うトンねん。まさか、アンタが叩きすぎたからとちゃうか？」

オオカミオ

「私が本気で叩けば、高層ビルくらいは簡単に・・・」

三男豚

「こわっ！！」

次男豚

「確かにこの家、妙な音がしてる」

三匹はいそいで家から飛び出した。すると、レンガの家は突然崩れて崩壊した・・・。

長男豚

「危なかったの」

次男豚

「なぜ、レンガの家が崩壊すると分かったのですか？」

オオカミオ

「壁を叩いていたら、明らかに鉄骨の入っていない音がしたからです」

三男豚

「どうりで、安く造ってくれたと思ったよ」

長男豚

「自分で造ったんとちゃうんか！」

みんなは大笑いした。しかし、三男豚の笑顔が消えた。

三男豚

「そういえば、八木さんの所も同じ建設の人が建てた家なんだ。早くこのことを知らせないと」

四匹は、7匹の子供がいる八木さんの家へ走っていった・・・。

第5話・反ダークラ勢力

刺客のオオカミオが、八木さんの家で大暴れしていたころ、ダークラは目的を果たしてトルコに帰還していた。

そのころ、ヨーロッパ地方では、反ダークラ勢力とやらが集結していた。

ピザマン

「ロミオとジュリエットの愛を守るために、ダークラを倒そう」

こげびざ

「ふふ。お前とこんな形で出会うとはな」

ピザマンはもともとは人間で、名をマキューシオといった。ティボルトに殺害されたものの、なぜか生き返り、気がついたらピザの体になっていた。

一方のティボルトも、ロミオに殺害されるのだが、こちらもピザマンと同じように生まれ変わったらしい。しかし、ティボルトの場合は闇の力のせい、炭化したピザの体だった。

音速マン

「音のごとき疾風で、魔王なんか倒してやるさ！」

音速マンはオーストリアを治めている王様。なのだが、政治よりも自分の速き力に意味を見出だすことが大切だという。マリーという娘がいる。

赤マント

「こりゃ、頼もしい面々だね。そこの薄っぺらいのはピザピザだけ

どさ！」

赤マントはドイツのミュンヘンを治めている妖魔。にも関わらず、妖魔王・ゼイロンや妖魔皇帝・ラグリアスには従わず、アーサーという勇者とお笑いコンビを結成していた。

ルービック

「早く僕の体を元に戻さない」と

ルービックはベルギーの王子。しかし、ダークラの呪いにより、ニユーハーフ化してしまったらしい。そのため、最も早くダークラを倒したいと思っている。名前の由来は、父親のアーシェロンがルービックキューブが完成できなくて、頭にきて名付けてしまったらしい。

アーサー

「勇者として、ダークラを絶対に倒す！」

アーサーは勇者として生まれた。オランダに住んでいる。勇者のくせにへたれ気味で、軍師の赤マントの方が強いと世間では囁かれている。ルービックは弟で、自分の弟の為に死に物狂いでダークラを倒すと決心した。

こうして集まった、反ダークラ勢力。しかし、ヨーロッパ地方にはダークラを嫌うものだけがいるとは限らないことを彼等は知るよしも無かった。

第5話・反ダークラ勢力（後書き）

今回は実在する地名や、モダンとは思えないキャラが出ていますが、あくまでもパラレルワールドですので、気にしないでください。

第6話・新たな罠？

反ダークラ勢力が結成されたことにラグリアスは驚いた。

ラグリアス

「ダークラを倒すだと？ ええい、オオカミオはまだダークラを倒せていないのか」

ゼブラス

「落ち着いてくだされ」

妖魔研究長・ゼブラスがなだめた。

ゼブラス

「なぜ、反ダークラ勢力に味方しないのです？」

ラグリアス

「ダークラは私の軍の力で倒す。そして、魔界の住人や、地獄の悪魔も我が支配下に置く」

ゼブラス

「ならば、奴らに混沌を見せつけましょう……。私の作り出したロボット兵器・ミレンに活躍してもらいましょう」

ゼブラスはミレンをごまちゃん宅急便に託した。

ゼブラス

「この人形を……。アーサーという奴に送ってくれ」

ごま

「ああ、わかりましたよ」

ごまはトラックにミレンを押し込んで、出発した。

ゼブラス

「ミレンで奴らを一人ずつ消していけば・・・」

ゼブラスが笑っているころ、ごまは笑えない状況に陥っていた。

ごま

「まずいなあ、タイヤがパンクしちゃったよ。」

ごまが途方にくれていると、森の奥に家があるのが見えた。

ごま

「いいところに、家がある。あそこで接着剤をもらおう」

家の前にきたとき、ごまは驚愕した！！

ごま

「この家、お菓子で出来てる！！」

あまりに有り得ない光景で動揺していたが、すぐに気を取り戻し、接着剤がわりに水飴をもらうことにした。すると、

ばあさん

「おや、かわいいアザラシだね」

ごま

「あんた、僕を食う気満々だろ。子供二人の気も感じるぞ」

ばあさん

「なんで、あたいが君を喰いたいと思っているのを感じ取れたんだ

い・・・!？」

ごま

「僕はアンタみたいな妖怪が嫌いなだけだー！ー！！！」

ごまは小刀ではあさんを一刀両断した！！そして、ごまは捕われていたヘンゼルとグレーテルを救出し、ばあさんの有り金を全て奪って逃走した・・・。

ごま

「いやあ、接着剤だけではなく、金も手に入るとは。送料無料ですってるから、とてつもない報酬だよ☆」

ごまはヘンゼルとグレーテルの家に向かった。そして二人にお宝を全て渡して車から降ろした。

ヘンゼル

「ごまちゃん、これいらないの？」

ごま

「いいんだよ。僕は海に潜って魚をたべてりゃ何とかやっていけるから」

そしてごまはアーサーの元にたどり着いた。

アーサー

「妖魔皇帝がこんな可愛い人形を我らに・・・？」

ごま

「製作者の話によると一人一人に“イイコト”をするらしい」

アーサー

「と、いうことはこれは人形じゃなくてロボットなのか」

ごま

「では、僕はそろそろ・・・」

ごまはトラックで走り去った。ラグリアスの元には帰らず、ダークラの元へ・・・。

第7話・ダークラ、正義に目覚める（前書き）

今回からダークラが善人に。実はもともと善人。

第7話・ダークラ、正義に目覚める

ここはお菓子の家。近くに真っ二つになって死んだばあさんの遺体・
。。すると、ばあさんの遺体が動き始めた。

ばあさん

「おのれ・・・ごまめえええ!!!」

ばあさんはお菓子の家に入り込んだ。そして、何かの呪文を唱えた瞬間、お菓子の家もろとも闇に包まれた・・・。

その頃、ごまは面接をしていた。

ダークラ

「職業はなんだったの？」

ごま

「宅急便とかやってました」

ダークラ

「お前、ラグリアスとなんかやり取りしたっていう情報が入ってきてるけど？」

ごま

「いや、反ダークラ勢力を潰す兵器を送り込ませられたくらいですけど」

ダークラ

「ラグリアス・・・俺の為に（涙）よし、お前を我が仲間と認めよ

う!!」

こうしてごまはダークラの仲間に。

いか魔人

「おお、私は君と同期になるな」

バーナード

「こいつ、妖魔でも悪魔でもないよな」

ごま

「アニマルです」

その時、ダークラ城に謎の飛行物体が現れた!!

ムシバーラ

「くははは!!!!ごま、出てこい!!!さもなくば世界中の子供を虫歯にする!!!」

ごま

「あんたは、あの時倒したばあさん!!なぜそんな姿に!?!」

この会話を聞いて、ダークラは驚いた。

ダークラ

「まさか・・・関係のない者にまで被害が・・・」

ダークラは深く落ち込んだ!

ごま

「ムシバーラを倒さねば!!」

しかし、ムシバーラはかなり上空にいる。

バーナード

「この槍でも喰らえ!!!」

バーナードは槍を投げつけた!!! しかし、攻撃は外れた。

バーナード

「やってらんねー!!」

いか魔人

「やりなげなやつだ。おい、そこに浮いてる不義なる人喰いよ・・・
降りてきてくれ!!!」

いか魔人は土下座した。しかし、ムシバーラはあざ笑っている!!

ごま

「人喰いといえば、第2天魔王・ガルバリアドスや食人妖魔・イトとやらがいたが・・・」

ダークラ

「俺は間違っていた・・・。ほんの冗談のつもりだったが・・・」

ダークラはそういうと、ダークキャノンでムシバーラをバラバラに吹き飛ばした。お菓子雨が降ってきた・・・。

ダークラ

「やっぱ、俺は性格上、悪人になれそうにない。元の善人になろう」

ダークラは普段のダークラに戻った。

ごま

「え？ 今までのダークラって一体・・・？」

ダークラ

「と、いうわけで・・・俺のやらかした物語の破壊を元に戻してくれ」

こうして、物語を元に戻す作業が始まった。

第7話・ダークラ、正義に目覚める（後書き）

あらすじの設定が大幅に変わってしまった。キャラがオリジナルでわかりづらいので、いつか詳しく説明する。

第8話・キャラの紹介（前書き）

一話から七話までのキャラの紹介。あと、あらすじの部分の一部変更。あとから介入してくるリュウハクにも期待せよ！

第8話・キャラの紹介

ダークラ・・・九代目魔王。第9天魔王とも。トルコのカッパドキアにダークラ城なる城を築いている。やっているのは魔王業だけで、トルコの政治には関わっていない。過去と決別するために覆面をらしい。まだ出てきてはいないが、16歳になる一人娘がいる。ダークラの年齢は55歳

ラグリアス・・・妖魔皇帝。ロシアの右半分を領土とした神聖ラグリー帝国を支配している。基本的には妖魔が配下だが、ダークラを倒して魔界の住人や悪魔をも従えようとしている。食わず嫌いはケフィア。年齢は37くらい。

ごま・・・この物語の重要キャラ。ラグリアスの依頼でロボット兵器を送り込んだり、ダークラの味方になったりと不可解な行動をとる。年齢は不明だが、何年経っても毛が白いままで、まったく成長していないというが・・・。

オメガ・・・ダークラの運営する

「ヘルクライム78柱」のNo.1。今のところメンバーは彼しか出ていないが、これからもっと出てくるぞ！

ゼブラス・・・妖魔研究長らしい。同僚にバイオテクノロジーを駆使して妖魔を作り出すウロヤズクや、生物をサイボーグ化することに長けているテルテルがいる。反ダークラ勢力を打ち倒すためにミレンという可愛娘ちゃんロボットを造った。光と闇の両方の力を使える。年齢は20代から30代、あるいは40代から50代らしい。

ミレン・・・ゼブラスに造られた美少女ロボット？違う、ロボット

兵器だ。今のところ活躍していないが、一人一人にイイコト（暗殺）しようとしている。

欲針奪男・・・欲張りな老夫婦の息子。斧を奪った女神に逆ギレしていた所をダークラに助けられて正義丸に生まれ変わった。

カエル王子・・・池の近くにいたイケメン王子。ダークラの呪いでカエルになり、池をさ迷っている。

オオカミオ・・・ラグリアスの配下。もとはゼイロンの所にいた。しかし、美を見出だすためにラグリアスの元に。ナルシ気味だが、他のものにも美を見出だすため、それほどでもない。八木さんちに行ったきり、情報が入っていない。フルボッコにされるとあるが・・・？

三匹の子豚・・・オオカミオに食われるどころか助けられた。長男は関西弁、次男はインテリ、三男は普通の子供みたいに喋る。

八木さん・・・七匹の子供がいるらしい。それ以外の情報によるとシングルマザー。

ヘンゼルとグレーテル・・・幼い兄妹。ばあさんに捕われていた所を助けられた。

ばあさん・・・子供を食べていた邪悪な山姥。ごまに瞬殺されるが、怒りの力でムシバーラと化すが、ダークラのダークキャノンで吹き飛んだ。

いか魔人・・・義に厚い、不気味な妖魔。不義が大嫌い。どうにもならんときは、土下座してまでも頼み込む。

バーナード・・・フィリピン出身の妖魔。名前の由来はバナナ。腕力に自信があるが、自慢の攻撃をミスると投げやりになる。（とくに槍系の武器で戦うとき）

反ダークラ勢力のみんな・・・前回紹介しているので特になし。

第8話・キャラの紹介（後書き）

次回のキャラ紹介は15～17話あたりでやる予定。

第9話・コンビニ視察

ダークラは物語の再生を迅速に進めるため、ヘルクライム78柱から悪魔を呼び寄せた。

ディステイニー

「お呼びですか？」

デス

「まったく、いきなり呼び出しやがって」

ダークラ

「口が悪いな」

そこにいたのは武将者のディステイニーと、オメガの子供のデスだった。

デス

「親父、なんで俺を喚んだんだ？」

ダークラ

「本当に口が悪い“小娘だな”！！」

オメガ

「“息子”です。何なりとお使いください」

ダークラ

「は、はい？息子？じゃあ、なんで女の服着てんだよ！？なんで髪が長いんだバカタレが」

デス

「何いってんだ、くそじじい。どんな服着ようが、髪を伸ばそうが勝手だろ？」

オメガ

「ダークラ様、これには訳が・・・」

ダークラ

「もういい。今日の仕事はコンビニの視察でいい」

デイスティニー

「コンビニか・・・。久しぶりだな。地獄の鬼とフードキャンプやって、しばらく行ってなかったな」

デス

「俺もコンビニとやらを見てみたい」

ダークラ

「じゃ、行ってこい」

二人はコンビニへ向かった・・・。

デス

「コンビニとやらには本があるんだな」

デイスティニー

「お前、コンビニっての初めてだから、よく観察しとけ。これくらい知ってないと田舎者だぞ」

デス

「なあ、ディステイニー。人間界ってのはどんなものを俺は知りたい」

ディステイニー

「まあ、まだ教えることはいっぱいあるが、今日は遅いからコンビニを観察するくらいでいいだろう」

デス

「この世界を知ったら、手始めに俺に寄ってくるやつらから魂を採る」

ディステイニー

「なあ、人の話聞いてる？」

二人はコンビニを観察し始めた。

デス

「なんだ、この機械は？」

ディステイニー

「それはATMって言って、金を引き出したり出来るらしい」

デス

「こんな機械にどうやって札束が・・・？」

さらにデスは防犯カメラにも興味を示した。

デス

「なんだあの天井に取り付けてあるやつは？」

ディステイニー

「あれは人間を監視する機械らしい・・・」

デス

「人間は人間を監視するものなのか」

デスはいろいろと知った。そして、帰還してこう言った。

デス

「俺、当分地獄には戻らない。だから、この城に住まわせてくれ」

ダークラ

「何で〜!?!」

ディステイニー

「俺もついでに住むよ」

こうして、ダークラの城に新たなキャラが住むことになった。

第10話・怪奇日食（前書き）

皆既日食が見られなかった人に送ります！？

第10話・怪奇日食

ダークラはイライラしていた。この世界ではトルコのカップドキアで怪奇日食（皆既日食とは一味違うらしい）が見られる日なのだが・・。

ダークラ

「雲のせいで怪奇日食が見られん！！ええい、ウェザーキング！」

ウェザー

「では、あの雲をどけましょう」

ウェザーが太陽のカードを使うと、雲はどこかへ行ってしまった。

デス

「すごい！ウェザーさん、天気を操れるんですね」

ウェザー

「ああ（心の声…ウェザーキングと言ってくれるのは、ダークラ様だけか…）」

ダークラ

「すごいけど、怪奇日食がきえとる！！いつもの晴れ間じゃねえか」

ウェザー

「では、満月のカードを使おう」

ウェザーが満月のカードを出すと、太陽と満月が重なり、怪奇日食となった！

ダークラ

「これで心置きなく、怪奇日食を見られる。ありがとな、ウェザーキング」

ウェザー

「はい。これからの時代は、天気という自然現象に指をくわえてい
てはならない。天気は変えなければならない」

ディステイニー

「気に入らんな。運命は受け入れろ。運命は変えられぬ」

ダークラ

「お前馬鹿か？さっき言ったのは、天気は変えられるのであって、
運命のことは聞いとらんが？」

ディステイニー

「アッー！」

デス

「ディステイニーをいじめないでくれ」

正義丸

「出たな、少女っぽい少年！！」

ダークラ

「久しぶりだ」

デス

「ディステイニーは確かに勘違いしたり、キャバクラ行ったり、便
所飯したりするけど、俺はディステイニーをキモいと思ったことは

ない。だってディステイニーは俺にとって兄さんみたいなもんなんだ・・・」

ディステイニー

「ああっ？（心の声…お前の兄さんになった記憶ねえし。なに俺の秘密ばらしてるんだ、この小僧・・・）」

オメガ

「気をつけなされ、ダークラ様。息子はああやって人々を翻弄するのです・・・」

ダークラ

「うん。しかと見える。彼らが望み、見ることの叶わなかった未来・・・平安の世が」

オメガ

「（心の声…人の話聞いてんのか、こいつ・・・）」

ウェザー

「あの・・・、私・・・。フランスで天気予報士になりました。それなので、反ダークラ勢力を見たのですが・・・」

ダークラ

「ああ、あれならパーティー全滅してただろ？」

ウェザー

「いいえ、普通にいましたが？」

ダークラ

「あれえ？どうなってんだ？」

ダークラは早速、ラグリアスにクレームをかけた。

ラグリアス

「お前はダークラ!!! どうしたんだ一体!?!」

ダークラ

「反ダークラ勢力がまだ生きてるらしいぞ。ロボット兵器どうしたんだ!?!」

ラグリアス

「なに!!!?!?!」それは一大事だ!!!」

ラグリアスはゼブラスを呼んだ。

ゼブラス

「どうしましたか?」

ラグリアス

「お前の造ったロボット兵器が起動してないんだってさ」

ゼブラス

「ああ、どおりで反ダークラ勢力のところが書かれてなかったんですね!!!」

ラグリアス

「物語を進展させるため、ロボット兵器を起動しろ!!!」

ゼブラス

「わ、わかりました」

ゼブラスはミレンのスイッチを押すため、ヨーロッパ地方へ行くことになった

第10話・怪奇日食（後書き）

そろそろ別々になっているストーリー展開を一つにします。

第11話・今、ひとつの計画が終わった（前書き）

ボタンの押し間違いに注意しよう。

第11話・今、ひとつの計画が終わった

ゼブラスは光と同化して、光の速さでアーサーのもとへやって来た。そのころ、反ダークラ勢力はロボットが起動しないことに不満を感じていた。

ピザマン

「捨てれば？」

赤マント

「どこで引き取ってくれるかな？オークションに出すか？」

その時、ゼブラスが現れた。

ゼブラス

「こんな可愛らしい兵器・・・いや、味方ロボットを売るとな！
？嘆かわしい。それで魔王倒せるのか？」

ピザマン

「お前、一体何もんなんだ？」

ゼブラス

「私の名はゼブラス。この娘の作者だ」

アーサー

「なんでそんな奴がここまでわざわざ？」

ゼブラス

「ある奴からクレームが来ましてね。それで、この娘を起動しにき

たのです」

ピザマン

「早く起動しろ!!! イイコトされたい!」

ゼブラス

「そうだな、君の場合は体が激しく砕けるくらいのイイコトかな?」

その時、ルービックが慌てながらやって来た。

ルービック

「そのロボットは、我らを暗殺するためのロボット兵器です!」

ゼブラス

「な、何を言うか、シーメールめが!」

音速マン

「そんな情報、どこから仕入れた!」

ルービック

「神聖ラグリー帝国の公式ホームページに『ゼブラスは、あらゆるロボット兵器を作り出す。最近は人の心を惑わせるような美少女ロボットを造った。ゼブラスってオタだなあw。byラグリアス』と、ありました!」

アーサー

「なにぃー!?!?・・・騙したな!」

ゼブラス

「ラグリアス様!!! 何、企業秘密をばらしてるんだ!?!?・・・こ

うなったら仕方ない。皆殺しモードに切り替える!!」

ゼブラスはミレンの背中のハッチを開くと、緑のボタンを押した！
ミレンがついに起動した!!

ゼブラス

「これで終わりだ。行け！ミレン!! 奴らを殺害せえい!!!」

すると、ミレンは反ダークラ勢力に向かってお辞儀した。

ミレン

「これから、あなたたちの友達として、共に戦いましょう!」

ゼブラス

「いけ！ミレン!! やつらを惑わせて、首を刳れ!!!」

しかし、ミレンは困った顔でゼブラスに言った。

ミレン

「あの・・・ゼブラス様、あなたが押したのは味方ロボットモードですけど?」

ゼブラス

「しまった!! 赤・・・皆殺し、青・・・暗殺、緑・・・味方、って設定なんだった!! じゃあ、なんで私の味方にならん!?」

ミレン

「標的のデータに反ダークラ勢力の皆さんが入っていたので、この人達の味方になったんです」

すると、ゼブラスはよろめきながら、

ゼブラス

「今、ひとつの計画が終わった」

そう言って、ゼブラスはぶっ倒れた!!

アーサー

「お前、なんで俺達を暗殺しようとしたんだ？」

ゼブラス

「ラグリアスもお前らと同じく、ダークラを倒すことを考えていた」

アーサー

「じゃあ、なんで俺達と協力しようとしなかったんだ？」

ゼブラス

「奴は他の勢力に邪魔されずに、自分の軍団だけでダークラを倒して、魔界の住人や悪魔を支配下に置こうと企んでいる。その計画のためにロボット兵器を造っておまえらを暗殺しようとしたのに・・・もう、戻ることはできぬ。我が首を取れ・・・」

ミレン

「なんで死ぬことしか考えられないの？」

ゼブラス

「彼らを暗殺しようとしたのだ。死んで詫びよう・・・」

すると、ミレンは涙目でアーサーに悲願した。

ミレン

「どうか、ゼブラス様を・・・殺さないで・・・ウルウル」

アーサー

「あ、ああ。わかったよ。誰も死んじやいないし。ゼブラス、一緒にダークラとラグリアスを倒そう!!」

ゼブラス

「共にダークラとラグリアスを・・・? わかった。あなたたちに味方いたそう。しかし、今はここに長くは居られない。プエルトリコに亡命する」

ゼブラスは光に溶け込み、プエルトリコへ向かった。その頃、反ダークラ勢力が反ダークラ・ラグリアス勢力になったの知らない二人は・・・、

ラグリアス

「いやあ、最初はあなたを倒そうと思ったのですが、よく話したら、気が合いそうです」

ダークラ

「必要なら魔界の住人や悪魔とか、いつでも派遣してやるよ」

クレームの電話から、いつの間にか長電話になり、二人は仲間になっていた。

第11話・今、ひとつの計画が終わった（後書き）

いつの間にかダークラとラグリアスが和解。あれ、リュウハクが涙目になっている？

第12話・ウナギで繋がる新たな存在（前書き）

デス「ウナギとタウナギの違いってなあに？」

第12話・ウナギで繋がる新たな存在

ダークラがラグリアスと電話で喋っていると、オメガ父子がやって来た。

デス

「おっさん、いま僕ら鰻を食べてきた。おいしかった」

ダークラ

「なんだよ、俺も喰いたかったぜ」

オメガ

「ダークラ様が長く電話で会話していたので、そっとしていたのです」

ラグリアスは会話を聴いて、あることをたずねた。

ラグリアス

「ウナギってなんだ？」

ダークラ

「あえていうと・・・、シーサーペントカリヴァイアサンを小さくしたものだ」

ラグリアス

「そうか・・・。そういや、うなぎパイってのがイギリスにあるっていう話を思い出した」

ダークラ

「ああ？うなぎパイって甘くておいしいやつだぞ。うなぎパイの間違いじゃね？」

ラグリアス

「プープー」

電話が切れたので、ダークラはジャージードビルを呼んだ。そして、乗った・・・。

オメガ

「どこへ行くんです？」

ダークラ

「ちよっくらイギリス行ってくる」

ダークラはジャージードビルでイギリスに行ってしまった。

ごま

「ジャージードビルって乗れるの？」

オメガ

「ペガサスが光の馬なら、ジャージードビルは闇の馬だ」

ごま

「ちよっと見てくるよ・・・」

ごまは変身した。すると、神々しい光を放つ美しい男になった。

エルフの長老

「その姿、まさか・・・!？」

デス

「じいさん、いつの間にかここに!？」

ごまは光のような速さでイギリスへ向かった。

オメガ

「ところで・・・エルフの長老がなぜここにいるんだ？」

エルフの長老

「大変なのじゃ。闇王率いるダークエルフがヨーロッパ地方を襲っているんじゃ。わしらエルフ族だけでなく、物語の住人も窮地に立たされているのじゃ。お願いじゃ。ダーク様に援軍をくれるようにたのんでくれませぬか・・・？」

オメガ

「ダーク様は今は居ませんが・・・。私が仲間を連れてそちらへ向かいましょう」

オメガはデス、デイスティニー、ウェザーを連れて現場へ向かった。そのころ、ダーク様は・・・。

ダーク様

「なんで、ネス湖に来ちゃったんだ」

その時、双戟を持った顔が緑色の男に遭遇した。

??????

「ここは魔王が来るべき場所ではない・・・」

ダークラ

「だれだ！？あと何で俺が魔王なのを知ってる！！！？？」

??????

「俺の親父がお前らのことを言っていた・・・」

ダークラ

「誰なんだ、お前の父親は？」

??????

「この星を侵略するためにやって来た者の頭領・・・」

その時、ごまがやって来た！！

ごま

「ダークラ、大丈夫か？」

ダークラ

「あ、あんただれ？ごま・・・なのか？（困惑）」

??????

「邪魔が入ったな。俺は去る」

ごま

「お前、名前はなんていうんだ？」

??????

「俺は・・・、代々から地球侵略の宿命を背負った一族・リュウ家の次男・・・リュウザイさ・・・」

リュウザイはそういうと、煙のように消えた。

ごま

「やれやれ。何だったんだアイツは」

ダークラ

「リュウ家・・・何やら運命的なものを感じる」

。そういつてダークラはトルコへ帰還した。ウナギを食べれずに・・・

第12話・ウナギで繋がる新たな存在（後書き）

ついに（やっと）現れた新たな存在・リュウ家。そして、闇の勢力も新しく加わる！？

第13話・ダークラの家族（前書き）

ダークラの家系が明らかに。ごまの本職も明らかに？

第13話・ダークラの家族

ダークラは城に誰もいないのでどうしたのかと思ったら、置き手紙があった。

ダークラ

「あいつら、ダークエルフと闇王を倒しに行ったな」

ごま

「闇王ってだれ？」

ダークラ

「奴はダークランド（モルドバ、ルーマニア、ウクライナ）とやらを支配している闇の存在だ。妹に闇江というやつがいるらしい」

ごま

「ああ、その女、僕の神社で働いてたぞ」

ダークラ

「お前、神社もやってたんか」

ごま

「うん。でも、ダークエルフの襲撃で倒壊しちゃったんだ。だから、建て直す資金を集めるために闇江を故郷のポルトガルに帰したんだが・・・」

ダークラ

「なんでポルトガル人が闇江って名前なんだよ!？」

ごま

「名前くらい、どうだっていいだろ」

ダークラ

「それもそうだよな。俺の本名・裁木真五郎だもん」

ごま

「そういや、お前と同じ苗字の奴が、昨日ある戦いで死んだらしいぞ。たしか、ガイロスって名前だったな」

それを聞いたダークラは落ち込んだ。

ダークラ

「ガイロス・・・俺の兄だ。たしか、71歳だったっけな」

ごま

「71歳・・・？ダークラより16歳も年上なんだな。離れすぎだろ」

ダークラ

「そういや、ガイロスの娘婿の英次郎がいたはず。そいつはどうした？」

ごま

「どうやら死んだらしい」

ダークラ

「姪の富江、・・・父も、夫も失うとは・・・かわいそうに」

ダークラはまたジャージーデビルに乗った。その時、闇の中から三

つ編みの少女が飛び出した・・・。

ダークラ

「マヤミ?。」

マヤミ

「パパ、早く日本に行きましょうよ」

ごま

「娘さんか?」

ダークラ

「そうだよ!!で、マヤミよ・・・さっきのマジックはなに?」

マヤミ

「闇に溶け込んで、日本からトルコへはるばるやって来たのよ」

ダークラ

「俺も出来るかな?」

ダークラは闇に溶け込んだ!そして日本へ向かった

ダークラ

「出来たよ・・・!!」

マヤミ

「さあ、ママの所へ帰りましょう」

ダークラ

「おまえらを巻き込まないために離婚したのに・・・」

ごまも光の速度ですぐ追いついた。そして、ダークラ達はマヤミの家へ行くことに。

ダークラ

「どこに住んでるんだ？」

歩いて10分、マヤミの家に着いた。その時、ごまはアッー！と叫んだ！！

ごま

「君の家の廃墟・・・僕の神社だ！！」

マヤミ

「え？そうだったんだ。あと、ものしり博士って人も近所に住んでるんだよ」

ダークラ

「ものしり博士は俺の少年兵にわいせつなことをやらかしたシヨタ野郎なんだが・・・」

ごま

「ものしり博士・・・思い出した！！ガイロスと英次郎を殺したのは奴だぞ！！」

ダークラ

「なにっ!？」

マヤミ

「そういえば、ここらで暴れていたダークエルフもものしり博士が

操っていたって話よ」

ダークラ

「ごまよ、明日ものしり博士を倒そう。ガイロスと英次郎と神社の
弔い合戦だ」

ダークラはそういうと、

「腹減ったー」と叫んで家へ入った。

第13話・ダークラの家族（後書き）

物語の住人の救済が・・・進まない。

第14話・ダークラ、大切な人（前書き）

今回は妙にシュール。そして、ダークラの過去も明かされる。

第14話・ダークラ、大切な人

ダークラは家に入った。すると、元妻のマキがいた……。

ダークラ

「元気だったか……誰かの元妻さん」

マキ

「お帰り……あなた……」

ダークラ

「……ただいまつても、最初からここに住んでないし」

三人と一匹は気まずい雰囲気で食事した。

ダークラ

「ウナギか……。これは宿命か？」

マキ

「あなたの分はないわ。これはごまちゃんの」

ダークラ

「けっ、所詮は元夫≦得体の知れぬアザラシなんだな」

マキ

「だってごまちゃん、可愛らしいんだもん」

ダークラが頭にきてテレビを見ていたとき、隣から会話が聞こえてきた。

マキ

「マヤミの名前の由来ってね、私の魔鬼の『魔』と、ダークラのダークである『闇』を組み合わせたもののなのよ」

ごま

「奥さん、魔鬼って名前なんすか（汗）」

マヤミ

「そうそう、パパがママと離婚するとき、なんて言ったんだっけ？」

マキ

「たしか、『平安の世を築いたら、また一緒に暮らそう』とか言ったのよね」

ダークラ

「はいはい。笑いたければ笑えばいいさ」

ごま

「いつ結婚したんですか？それとダークラの素顔って見たことありますか？」

マキ

「たしか、あの人が35歳で私が24歳くらいの時に結婚したわ。でも、その時から覆面を被ってたわ」

ダークラ

「俺は30歳の時から覆面顔だ。そこのバカ熟女とは、魔王になった3日後に交際が始まってな。3ヶ月後に結婚したんだ・・・」

マキ

「マヤミが生まれたのは、そのくそジジイが39歳のとき、私が28歳の時よ」

ごま

「元々はどこに住んでいたの？」

ダークラ

「その年増ババアの要望で、日本の海に近い所に住んでいた」

マキ

「ずっと聞いてれば、なんてひどい言い方するの？あの時の優しさはどこ行っただの??」

ダークラ

「・・・すまん。あつくなりすぎた。やはり、俺は独り身のほうが良さそうだ。復縁の話はなかったことにしてくれ」

ますますひどい雰囲気の中、マヤミが口を開いた・・・。

マヤミ

「ねえ、ママ……。しばらくここを離れて、パパと一緒に住んでいい？」

ダークラ

「な、なに言ってるんだ。学校はどうするんだ？」

マヤミ

「瞬間移動使えば何とかなるよ」

場の空気がますます重くなるとき、テレビで臨時ニュースが流れた。

キャスター

「臨時ニュースです。闇王の軍勢と闇江の軍勢が挟み撃ちでアーサーの軍を追い詰めているようです。ダークラさん、これを見ていたら、すぐに助けてください」

よく見てみると、ニュースキャスターはルービックだった・・・。

ダークラ

「勇者が魔王でない、別の闇にやられるなぞ、目も当てられぬ。助けにいこう」

マキ

「あなた・・・。その行為はあなたを追い詰めるようなものじゃ・・・」

ダークラ

「・・・魔王は、いつ死ぬかわかんものだ。だから、お前を悲しませたくなくて別れたんだ。俺なんか忘れて、別の男と再婚しろ」

ダークラは立ち去った。

ごま

「では、奥さん・・・行ってきますね」

マヤミ

「ママ・・・、私も行くね」

マキ

「ダークラ……。たとえ魔王でも……。たとえ離婚していても・
・私にとって、あなたは大切な人です。だから……。いつまでも、
待ってるからね」

マキはダークラの無事を祈った……。。

第14話・ダークラ、大切な人（後書き）

ダークラ、まさかの勇者との和解！？と、書いているが、キャラ紹介第二期をやるつもり。

第15話・キャラ紹介第二期（前書き）

ごま「ジャンルが多くなりすぎたなあ」

第15話・キャラ紹介第二期

マヤミ・・・ダークラの一人娘。どうやら16歳。三つ編みの美少女で、スタイルは母、容貌は父に似ている（ダークラの幼なじみの情報であり、

「ダークラはブス」と言っていたカエル王子は涙目になったらしい）とされている。音場ドエフスキーの一人息子・音場未来が彼氏らしい。最初は母と住んでいたが、父・ダークラが心配で、ダークラと暮らすことに。闇の力で瞬間移動できるらしい。

マキ・・・ダークラの元妻。ダークラとは11歳も歳が離れている。44歳。ダークラとは最近離婚したらしいが、平安の世が来たらまた復縁することになっている。ダークラと再会していきなり喧嘩になり、ダークラから別の男と再婚するように言われるが、ダークラとまた暮らせるようになることを祈っている。

ガイロス・・・ダークラの兄で71歳。ものしり博士に殺害されたという。料亭を営業していて、娘婿の英次郎に継がせて隠居しようとした矢先の事だった。

裁木英次郎・・・過去の情報が一切不明の男。34歳。料亭で働いていて、その腕前を見込んだガイロスによって富江と結婚した。そして料亭を継ぐ矢先にものしり博士に殺害されたとされるが・・・？

富江・・・ガイロスの娘、ダークラの姪にあたる。32歳で、従姉妹にあたるマヤミの二倍の年齢である。夫の英次郎が死んで、未亡人となってしまうが、彼女は英次郎がまだ生きていることを信じている（実は、英次郎の死体が見つかっていない）。今はガイア丸と店を切り詰めている。

ガイア丸・・・ガイロスの二番弟子。腕前はそこそこあったので、まだ店の状態は保たれている。正直者なので、店を乗っ取るつもりはない。ある泉に包丁を落とした際、金の包丁を持った女神の質問に正直に答えてしまったため、金の包丁を手にいれたが、大事な包丁は返って来なかった・・・。

デス・・・オメガの息子。

長い髪で、女物の服を着ている。

ようするに女装少年で、名前のとおり、死に関わる技を使う。特にマスターデスは万物の生物を抹殺できる。年齢は13歳。最初は世間知らずなクソガキだったが、世間の物事を知っていくうちに真面目になる。ダークラを毛嫌いしている。（ダークラもデスが男らしくないので嫌っている）ヘルクライム78柱ではNo. 21。

ディステイニー・・・運命は定められたものだから、受け入れるがモットーの武將者。

25歳。No. 8。運命は変えられるという理論を真っ向から反対する。そこでリーブ21のある一言に目茶苦茶キレたというが・・・。デスに兄さんといわれ、慕われているが、本人はうるさがっている。キャバクラに行ったり、便所飯をやったりと、自分の運命をどうにかするべき。地獄では鬼と一緒にフードキャンプをやった。

ウェザー・・・天気をカードで操る、No. 31の悪魔。

フランス出身で、紳士的な態度をとる。

フランス人のわりに、わりと気を使うほう・・・らしい。

天気予報士で、彼の予報は外れたことがない（なぜかはもう知っているはず）らしい。戦うときは天気を操作して戦う（火属性の時は雨を降らせるなど・・・）ので、火・氷・金属・草・虫属性あたりは注意しよう。ダークラからはウェザーキングと呼ばれる。年齢は自

分のナンバーより若い。白い鎧を着たような姿をしている。

闇王・・・モルドバを拠点にルーマニア、ウクライナを取り込み、
ダークランドを築いた。ダークエルフが配下だが、たまにバンパイ
アも味方になる。真っ黒な鎧を着ている。ラディッツみたいな髪型
をしている（闇江より髪が長い）。独裁的に見えるが意外と共和制
らしく、何人かの仲間がいると考えられる。三十路。ゴツイキャラ
としてはまだ美形のほうらしい。

闇江・・・闇王の妹。

ごまの所にいた巫女でもあるそうなの。これはダーククラにもいえる

ポルトガル人にも関わらず日本名であるだけでなく、黒髪のロング
ヘアーである。闇王も同じポルトガル人らしいが、なぜモルドバに
いるのかは現時点では不明。闇王と挟み撃ちでアーサー軍を追い詰
めるが、偶然遭遇した総大将・アーサーと禁断の恋に落ちる。年齢
は不明だが、ごま神社に入った時は十代後半だったらしい。

ものしり博士・・・ごま神社を破壊し、裁木の二人を葬ったとんで
もない変態。どんな戦力を持つかは不明。しかし、敵をテレビの中
に引きずり込んだり、光や闇の力を使わずに瞬間移動したりする。
シヨタなものには変わりない。ダークラに強い怨みを抱いている。

エルフの長老・・・ヨーロッパ地方をダークエルフが襲撃してきた
ため、ダークラに援軍をよこすよう、頼みにきた。ごまが変身した
姿に驚いていたが、一体どうしたというのだろうか・・・？

リュウザイ・・・ネス湖に現れた謎の男。顔の色が緑色だった。地
球を侵略する宿命を背負った一族の次男らしい・・・。

ごま・・・ずっと白いままの状態だけでなく、光の男に変身したり

と、さらに謎が謎を呼ぶキャラに。暗黒神を信仰するダークエルフに対し、エルフ族は太陽神を信仰しているのだが・・・？

ラグリアス・・・妖魔皇帝。ダークラと和解した。大した活躍は未だにないが、ケフィアが苦手らしいぞ・・・！！

ダークラ・・・美形だったことが判明してしまった第9天魔王。未だにウナギを食べていない。

第15話・キャラ紹介第二期（後書き）

未だに登場していないキャラも出ていますが、後から出てきます。
リュウ一族……。光と闇の恋……。ごまの秘密……。キャラ
紹介第三期の頃に全てが明らかになる？

第16話・さらば、魔王（前書き）

あの世界から仰天のゲストキャラ出現。そして、ダークラが終わる？

第16話・さらば、魔王

ダークラが着いたころ、闇王率いるダークエルフはオーストリアまで進軍していた……。そして闇江は中央突破して、フランスやスペインなどアーサーの本拠地のオランダに向かっていた。

デス

「遅いんだよ、おっさん」

ダークラ

「悪かったな、少女モドキめ」

ダークエルフ

「けっ、エルフは馬鹿な魔王に泣きつかなくや生き残れないほど、弱い存在になっちまったんだな」

イリス丸

「てめえ……。違うんだよ!!」

エルフ族の猛将・イリス丸が反発した。

レイラ

「いいわ、イリス丸、もっと言いなさい!」

イリス丸の幼なじみが煽った!!!

ダークエルフ

「ええい、この小娘え!!」

ダークエルフがレイラに襲い掛かった！その時、弾丸がダークエルフを貫いた・・・！

ダークエルフ

「だ、だれ・・・？」

雑賀孫市

「雑賀孫市、ゲストキャラとして、ただ今参上ってか？」

イリス丸

「てめえ、俺の女に何しやがった！？」

雑賀孫市

「た、助けてやったんだろ・・・アッーーーー！」

孫市は殴られた！！

その時、ダークラ達がやって来た。

デス

「大丈夫か？」

雑賀孫市

「おっ、美少女発見！」

オメガ

「息子です」

雑賀孫市

「えーーーー？これで二人目だな、男を女と勘違いしたのは」

ダークラ

「話してるヒマがあったら、目の前の敵を倒せ」

と、いうわけで戦うことに・・・。

ダークラ

「お前、一体ずつしか倒せぬのか？」

雑賀孫市

「銃だからな」

ダークラ

「こんなじゃダメだ。デス、やるぞ」

デス

「あ？ ああ・・・」

ダークラは闇からタンクローリを出した。そして、ダークラはそれに乗ってダークエルフの所に突っ込んだ！！！！

ダークラ

「ふははははー！！！」

デスはデスロンドでダークエルフを屠っていた。

デス

「ははは、ゴミのようだ！！！」

ダークラはタンクローリを乗り捨てた！タンクローリは横転し、大

爆発した！

雑賀孫市

「これは戦じゃねえ……。ただの殺戮だ！！ダークラ……。やっぱり九代目も外道だったな」

ダークラが戻ってきたその時！！ダークラは孫市に銃撃された！！！！

ダークラ

「デスと一緒に……。平安の世を見たかった……」

ダークラは倒れた。そして光の粒となって消えてしまった……。デスは、消えていく光を見ながら泣き叫んだ。

デス

「くたばんじゃねーよ、くそじいーーーー！！！！（涙）」

そのころ、アーサーは城を守っていた。すると、闇江がやって来た。

闇江

「あなたの命、もらいにきたわ」

アーサー

「簡単には死ねないな」

二人は顔を合わせた。そして、目があった。胸がキュンとなった……。・。

アーサー

「（心の声…う、美しい……。きっと運命の人に違いない）」

闇江

「（心の声…勇者って、生意気な奴だと思っていたけど、あの人の目は本当に清みきっている・・・）」

禁断の恋、始まる。

第16話・さらば、魔王（後書き）

ダークラ、死亡してしまったが、多分大丈夫！？あと、アーサーと
闇江の恋も大丈夫かな？

第17話・怒りの逆襲（前書き）

最初はオマケっぽいものがあります。ってか、雑賀孫市って、あのゲームやってる人じゃないとわからないだろうな。

第17話・怒りの逆襲

ごま

「本編行く前にこれを見てくれ」

デスが女装に走った理由……。あるトラウマが関わっている。
それは、デスが寝ていた時、オメガが冗談半分でやらかしたこと・
・。

オメガ

「息子よ……」

デス

「親父……なんだ？……へああっ！？」

見ると、父親の手の平から刀が生えていた。

オメガ

「デスよ、これを見てどう思う？」

デス

「すごく……怖いです」

それ以降、デスは髪を切らず、女物の服を着るようになった……。

ごま

「なんで親父の手から刀が生えてて、女装に走るんだよ？……はい、本編いくよ」

ダークラは黄泉をさ迷っていた。すると、太った公家を見かけた。

ダークラ

「どうした、迷子か？」

今川

「まろ、怖くて・・・この先行けないんだ・・・の・・・」

ダークラ

「・・・そうだ、ちょっと君を強くしてやるよ・・・」

ダークラは義元に怪しいビームを放射した・・・。
その頃、デスは涙に暮れていた・・・。

デス

「ダークラ・・・、ううつ・・・」

オメガ

「ダークラは、もう・・・一度生き返る」

デス

「え・・・？」

オメガ

「ダークラは今までに24回死んでは生き返っていてな。これで25回目だな」

デス

「は・・・はいいいっ?!?!?」

孫市

「おまえらは殺さないから安心しろ」

その時、地面から巨大な手が現れた！！！

ダークラ

「もう終わりだ、雑賀孫市！！」

デス

「ダークラ！！」

ダークラ

「デス・・・お前の闇に対する戦い、見事だった。お前が男らしくないのは、見た目だけだ」

デス

「ダークラ・・・クソバカー！！」

ダークラ

「なっ！？」

孫市は巨大な手に捕まっていた！！

孫市

「だれだ、てめえ」

今川

「俺は今川義元。ダークラの力でムキムキのマツチヨになった！！」

孫市

「ダークラ、お前・・・なんなんだ!!!!」

ダークラ

「孫市を封印する!!!」

ダークラは孫市を闇に封印した!!!そして、今川をカプセルに閉じ込めた。

ダークラ

「まずは満足」

デス

「あれ、ダークエルフが見当たらない」

オメガ

「お前が泣いてる間に他の奴らが押し返して、闇王の軍は撤退した」

音速マン

「俺の屋敷にこい。他の奴らも来ている」

ヨーロッパ地方の惨劇が静まったころ、アメリカでは・・・。

リュウザイ

「ダークラという男・・・、父によく似ていた」

リュウハク

「そろそろ、わしも出るとするか」

ついに、レプティリアンの地球担当・リュウ一族の長リュウハクがついに動く!!!!

第17話・怒りの逆襲（後書き）

ついに三傑がそろろう？でもまだ、物語の住人の救済、神社と親戚の
仇討ち、オオカミオの行方とかの展開が停滞してるんだけど・・・
（苦）

第18話・ダークラ・イン・ナイトメア（前書き）

今回は一部ガチホモなシーンや、ダークラの夢の中では意味不明なキャラがいっぱいでるので注意。後半あたりでついにあの三人がそろろう。

第18話・ダークラ・イン・ナイトメア

深夜零時……。他のものが寝静まったにも関わらず、ダークラとデスは戦国無双やってた。

ダークラ

「お前もつとフォローしやがれ!!」

デス

「僕、バーチャルの人間殺すの好きじゃないんだ。何となく悲愴なものが……」

その時、音速マンが怒りながらやって来た。

音速マン

「いい加減寝ろよ。ダークラ、忠勝の無双バグはマジで止めてくれ」

ダークラ

「だってベッド、一つしかないんだもん」

音速マン

「二人で一緒に寝ればいいだろ!!」

デス

「えー、やだよー。55のおっさんなんかと寝るのなんて」

ダークラ

「それは石田純一（同い年）を否定したようなもんだぞ!？」

デス

「わかったよ。寝るよ」

ゲーム機は音速マンが持って行ってしまった。

ダークラ

「さて、♂寝るぞ、デスよ♂」

デス

「なんだよ、♂のマークは？」

デスはダークラと同じベッドで寝ることになった。しかし、デスは面白くなかった。

デス

「（心の声…こんな変態のために涙を流すなんて、バカバカしかったな）。この屈辱、晴らさせてくれる」

デスはナイトメアの呪文を、眠っているダークラの耳元で唱えた。その最中、また目から涙がこぼれた。

デス

「あれ・・・なんでまた涙が？」

デスは涙を拭いながら、眠りに着いた。

ダークラはとんでもない悪夢をみた・・・。

ダークラ

「あれ、目の前にいるのは・・・ささやき女将？」

ささやき女将

「ぼそぼそ・・・」

ダークラ

「な、なんて言ってるのかな？」

ダークラが耳を近づけた瞬間、女将は大声で怒鳴った！！

ささやき女将

「しねー！！！！」

するといきなり、マクドナルドの場面になった。

ダークラ

「どうせ、らんらんるー☆とかだろ？」

すると店頭にいたのは直江兼続だった。

直江

「愛するお客諸君、義を持ってナオエーセットを買ってくれ！！」

よく見ると、・愛¥0円となっていた。

ダークラ

「たしかに、そうだけどな」

店を出ると、何やらへんてこな世界にやって来た。

ダークラ

「なんだ、目の前にうさみみのやつがいるぞ？」

見ると、ポピーという奴だった!!

ポピー

「死ね!!」

ポピーはナイフを投げてきた!!

ダークラ

「なんだ、こいつ・・・？」

ダークラはダークガードを使って跳ね返した!!するとそれは直江兼続に当たった!!!

直江兼続

「馬鹿な!?!私には心臓が三つあるはず・・・!?!」

ダークラはぞっとした。

ダークラ

「まさか、呪われたか!?!名前のそっくりさんの呪いでも喰らったか・・・!?!」

するとまた場面が変わった。料理の置かれたテーブルの前に座っていた。そして、見知らぬ男がこう言った・・・。

リュウハク

「英雄は・・・お前と、わしじゃ」

その時、コップが床に落ちた。その瞬間、目が覚めた。

ダークラ

「変な夢だった・・・」

となりでデスがスヤスヤ眠っていた。

ダークラ

「何も言わないときは可愛いんだが・・・。ケータイで撮影しよう」

ダークラはデスの寝顔を写真に収めた。そして、ベランダに出ると・・・。中央に料理の置かれたテーブルがあった。

ダークラ

「まさか・・・？」

見ると、夢のなかにいたあの男が目の前にいた。

リュウハク

「お前と話がしたかった」

リュウハクはダークラをテーブルの前に座らせた・・・。

ダークラ

「で、何の用だ・・・？」

リュウハク

「この世界の英雄は誰だと思う？」

ダークラ

「アーシェロンなんかはどうだ？」

リュウハク

「奴は確かに強かった。あのロックトロールを一刀両断するほどの実力の持ち主だったからな。しかし、奴はもうこの世にいない」

ダークラ

「では、アーサーは？」

リュウハク

「奴は勇者だろ？ 英雄とは一味違う」

ダークラ

「では、誰が英雄なんだ？」

リュウハク

「お前と、わしじゃ・・・」

すると、上空からなにかが落ちてきた。

ラグリアス

「私もその一人だー！！！！」

ラグリアスはテーブルに着地した！！食べ物飛び散る・・・。ダークラの正夢は夢のまた夢になってしまった！！

ダークラ

「これって、三傑ってこと？」

リュウハク

「ふっ、そうなるな」

ラグリアス

「三人でかんばろう」

こうして、三人は薔薇の咲き誇るベランダで三傑の誓いをたてた。
その頃、音速マンはというと・・・。

音速マン

「忠勝の無双バグおもすれー。・・・もう朝になっただど!?」

第18話・ダークラ・イン・ナイトメア（後書き）

ついにそろったダークラ、リュウハク、ラグリアスの三人（厳密には一人と一体と一匹）。ここから馬鹿なことが始まってしまうのか？

第19話・自重しなイカ？（前書き）

今回は大分短めです。またあのイカが現れるが・・・。

第19話・自重しなイカ？

ある朝、三人はある事を話していた。

ダークラ

「数で上り詰めた者は、また数で転ぶ……。これを解決するにはどうしたらいい？」

すると、槍を持った人がこう言った。

ささやき女将

「……偽……。では……。ないで……。……しよ
うか？」

ダークラ達はスルーした……。そして、リュウハクが言った。

リュウハク

「わしは覇道を歩む」

ルカリオ

「波動……！！！」

ダークラ達は犬をスルーした。すると、ラグリアスがこう言った。

ラグリアス

「皆が一人のため、一人が皆のために尽くせば、平安の世は来るんじゃないか？」

ダークラ

「信じられんな・・・」

リュウハク

「少年と寝るほうが信じられぬよ。わしだったら、あの美人姉妹を両サイドに侍らせたいわい・・・」

ダークラ

「美人姉妹って、ヘルクライム78柱のNo.24のヘブンの娘のことか？」

ラグリアス

「まあ、話を戻して・・・。試してみるか？ラグリアス！！」

直江

「直江兼続」

直江

「直江兼続」

ドラえもん

「のおびたぁー！！！！」

直江

「直江兼続」

直江

「直江兼続」

変な乱入者が現れたため、再び場面を戻した。

ラグリアス

「ラグリアス・・・」

ダークラ

「ダークラ！」

リュウハク

「リュウ・ハクレン」

ラグリアス

「これにより、我ら三人はこの世界の三傑になることを誓います」

こうして魔王・ダークラ、妖魔皇帝・ラグリアス、リュウ一族の長・リュウハクの三人は晴れて三傑となった。

直江

「ナオエーセット、買ってくれ。もれなくイカナゲットもついて来るぞ」

ダークラ

「要りません」

直江

「何と言う不義の極み!!」

ダークラは直江をトイレに流す（ヲイ）と、ある話を持ち込んだ。

ダークラ

「物語の住人の救済をまだやってなかった。だから、今日から実施しよう。俺はカエル王子を元に戻す。ラグリアスは白鳥王女を何と

かしてくれ。リュウハクは・・・？」

リュウハク

「ないな。なら、わしはいったん帰る」

ダークラ

「まて、おやゆび姫を助けろ」

リュウハク

「はひっ？」

こうして三人は物語の住人を助けに行った・・・。

第19話・自重しなイカ？（後書き）

20話辺りからメルヘンが入ってくるが、馬鹿が入ったらどうなるんだろう？

第20話・暗黙からの帰還（前書き）

今回はマジでグダグダ。ヘルクライム78柱のキャラが二人現れた
り、オメガは金属を喰うことが出来るなど。本来の目的が・・・。

第20話・暗黙からの帰還

ダークラ達がどっかへ行ってしまったところに、オメガは目を覚ました。

オメガ

「あゝ、よく寝た。・・・へああっ!?!?!」

見ると、目の前にヘルクライム78柱のヘブンとサインが立っていた。

ヘブン

「暗黙の世界のダークフェンリル、ギガケルベロスの討伐、完了しました・・・」

オメガ

「ほう・・・もう完了したか」

サイン

「腹減った。飯もらおうぜ」

二人は勝手に食堂に入った。

サイン

「おお、デス・・・。前より可愛くなったか?」

デス

「サインこそ、前より強くなっただろ?」

ウエザー

「つい最近、皆既日食があったが、そちらはどうだい？」

ヘブン

「いや、皆既日食バンバン起きていたよ」

サイン

「皆既日食になるたんびにダークフェンリルの遠吠えが飛んできて、死にかけて事が何回あったか・・・」

オメガ

「そういや・・・深夜、隣の部屋で忠勝が叫んだかと思うと、凄まじい効果音が・・・」

デス

「げほ、ごほ、ぐへ・・・（汗）」

オメガ

「やっと静かになったと思ったら、上からまた忠勝の叫び声と効果音が聞こえてきて、仕方なく耳を塞いで寝た」

音速マン

「・・・。そういや、他の奴らが見当たらんぞ？」

デス

「ヨーロッパの奴らは自分の国に帰った。ダークラの娘のマヤミは学校に行くために日本へ帰った。ダークラは知らん。音速マンの家内はショッピングに出かけたぞ」

音速マン

「つて、ことは今ここに要るのは悪魔だけか？」

オメガ

「そうなるな」

ヘブン

「そういえば、暗黙の世界でミスリルを見つけましたぞ」

オメガ

「これを喰えば、私の手から生やせる刀がもっと強く・・・」

するとデスが涙目になった・・・。

オメガ

「そうだ・・・。お前、昔私のハンドブレードをいきなり見せられて非行に・・・女装に走ったんだよな」

ヘブン

「デス様・・・。オメガ様はハンドブレードが使えぬと、全くいっていいほど弱くなってしまっんです。だから、解禁させて下され」

デス

「いやだ」

デイスティニー

「粹がってんじゃねー！ー！！」

いきなり現れたデイスティニーはデスを天井に吹き飛ばすほど殴りつけた！！！

デス

「ぬぎゃああああっ！！！！」

ディステイニー

「こいつ、父の失態を言い訳にこんな格好してたんだ！！オメガのハンドブレードなんか、別に怖くなかったんだ」

オメガ

「なにい！？騙したな息子よ・・・」

デス

「ごめん・・・」

音速マン

「いい加減、帰れよ」

ディステイニー

「本当は母さんに似ていたから・・・だろ？」

デス

「うん・・・（涙）」

音速マン

「あの・・・何が言いたんだ？」

オメガ

「母さんか・・・。確かにお前は母さんに似たところがある。おてんばな所とかな」

その時、マヤミが闇から飛び出した。

マヤミ

「オメガさん、未来くんのお見舞いに来てくれませんか？」

オメガ

「・・・。ああ、わかった」

オメガはマヤミと一緒に日本へ向かった。

デス

「なんか、マヤミとかいう女子高生・・・僕の母さんに似た雰囲気があるんだけど？」

音速マン

「（心の声…デスの母親ってどんなやつなんだ？）」

ヘルクライム78柱のみんなが帰ったあと・・・。

音速マン

「にしても、デスとオメガって似た叫び声出してるな・・・。父子だからか。あとダークラとデスのムカつきっぷり・・・あの二人、血い繋がってんじゃないのか？」

音速マンは冗談半分に戯れ事を言っていた・・・。

第20話・暗黙からの帰還（後書き）

ごま「なんでオメガは、お見舞いに行かなきゃならないんだ。NO.
1なんだから、他の奴らにまかせりゃ・・・アッー！」

第21話・深海の魔物、解印（前書き）

オメガのお見舞いの話はジャンルの的変わってくるので、番外編やるつもり。今回はオメガが帰ってきてからの話。

第21話・深海の魔物、解印

悪魔達はダークラ城に戻っていた。城に帰ってきたオメガはダークラに頼まれた物を封印するため、倉庫を開けた。

デス

「父さん、ここは・・・？」

オメガ

「ここはダークラが拾ってきたりしてきた、意味不明なアイテムを入れておく場所だ？」

デス

「ふーん……。ねえ、この壺の中身なに？」

オメガ

「開けるな。それは猿酒だ。腹が痛いときに飲むといらしい」デス

「まあ、僕は子供だから飲んじゃダメだよ」オメガ

「まあ、ネタのために所持してるんだよ。イスラムでは酒は飲めぬからな。ちなみに中身見ると、死ぬよ」

デス

「まさに、デスポット・・・！！」

オメガは奥の棚にカプセルとボールを置いた。

デス

「それって・・・今川と孫市だね」

オメガ

「うむ……。では戻るぞ」

デス

「もう少しだけ、見ていい？」

オメガ

「ここは危険だ。お前だけ置いていくのは……」

デス

「僕、もう13歳なんだよ？それに父さんは僕のが可愛くないの？」

デスは目をうるうるさせた……。

オメガ

「（心の声…こいつ……。！！！！）わかったよ。見ててもいいぞ。そのかわり、変な所をいじるなよ……」

デス

「ありがとう、父さん！！」

オメガが立ち去ったあと、デスは何んでもないことをやらかしてしまっ……！！

デス

「さて……。邪魔な親父はいなくなったことだし……。ん？なんだ、この変な水槽は？なにになに……。？“深海の魔物濃縮水槽”だって！？」

近くに網が置いてあった。デスは悟った……。

デス

「ははーん。これで、この中をウヨウヨしている物体をすくうんだな」

デスはさっそく、網でその物質をすくった。そして網から出した。すると大きな魚になった。

デス

「なんだ、これ……？口がデカイ鰻だな」

ごま

「おっ、その魚はフクロウナギだね」

デス

「なあっ！？……なんだ、ごまちゃんか……。ビックリした」

ごま

「僕がダークラに献上した、深海の魔物濃縮水槽が心配になって来たんだけど……。うん、君ならそれを使いこなせるかもしれない」

そこで、ごまは水槽を持ってデスの部屋へ入った。

ごま

「暗いところに置いてね！」

デス

「この中の魚を全て覚えれば、僕モテるかも」

ごま

「ああ・・・、そうだな。（心の声…その姿じゃ、男しか寄って来ないから）」

この会話をディステイニーは偶然聞いてしまった。

デスは部屋を出た、その時！ディステイニーのみねうちが飛んできた！！デスは気絶してしまった！

ディステイニー

「許せ、デスよ・・・」

ディステイニーはデスをオメガの所へ連れていった・・・。
そしてオメガは我が子をベッドに縛り付けた。

オメガ

「すまぬ、息子よ。お前はまだ“珍味”の味を知るには幼過ぎる」

オメガはスキップしながらデスの部屋へ入った。

オメガ

「ごま！！この水槽の生き物は喰えるのか！？（興奮）」

ごま

「全部喰えるかはわからないよ・・・」

オメガ

「じゃあ、喰ってみないとな☆」

オメガは網で生き物をすくいまくった！！！！

ごま

「あああゝ。メンダコやユメナマコは食えないと思うよ!! デスが泣くぞ!!」

オメガ

「別に構わん!! なぜなら地獄の悪魔だから!!! そして、我が子を泣かせても何ともないわ!!! ヘルクライムデビル（地獄で泣く悪魔）だもん」

デイスティニー

「土鍋持ってきた!!」

オメガはヘブンやサインも呼んで、深海の生物たちをガンガン喰いまくった!!!

ごま

「あああ・・・。僕がせっかく作り出したアイテムを!!!（怒）」

するとデイスティニーがビビってこう言った!!

デイスティニー

「なあーーー、でかいダンゴムシがーーー!!!」

ヘブン

「ぐわっ!!! イカからアンモニア臭が!!!」

サイン

「固っ・・・!!! と、思ったらなんだこの貝・・・鉄で出来る!!」

三人はどっかへ行ってしまった。そして、最も恐るべき事態が！！

デス

「親父ーーーーっ！！！！（大泣）」

オメガ

「わぁーーーー許せ！！！！」

ごま

「全く愚かな親父だ。殺されてもしらん」

このあと、ダークラ城の天気は大荒れになったという・・・。

第21話・深海の魔物、解印（後書き）

オメガ「許せ、息子よ……。ぬぎゃあああ!!!!」

第22話・元の姿になあれ☆（前書き）

今回はいきなりストーリーが進みます。突然、新キャラも出てきます。シヨタな展開に注意。

第22話・元の姿になあれ☆

自分の城で嵐が起きている頃、ダークラはカエル王子を探していた。

ダークラ

「どこ行っただあいつ……。まさか、食われたんじゃないだろうな？」

その時、ダークラの目の前にポニーテールの美少年が現れた。

ダークラ

「お前、だれだよ？」

デス

「デス……です」

ダークラ

「なんだ、デスデスって？デスっていう男の娘なら知ってるが、デスデスなんてしらんな」

デス

「僕だよ、デスだよ……」

ダークラ

「あれ？よく見たらデスにそっくりな顔立ちだな」

デス

「だから、デスだって。久しぶりに男物の服着て、長い髪を縛ってみたんだよ……」

ダークラ

「へえ、デスって正常だとこんな感じなんだ。顔はあまり変わらないが・・・」

デス

「そりゃ、もちろんスッピンだから顔は変わらないよ」

ダークラ

「お前の顔立ち、誰かに似てるような？」

デス

「母さんに似てるんだ」

ダークラ

「お前の母さんに会ったことはないんだが……。それでもどっかで出会ったような？」

デス

「僕の母さんと妹、アメリカのどこかに監禁されてるらしいんだ」

ダークラ

「お前、妹いたの!？」

その時、池からなにかが出て来た!!

ダークラ

「なんだ？」

現れたのは、マーマンらしき生命体だった。

ザンバ

「我が名はザン・バサラ。ザンバと呼んで下され」

デス

「なんだ、こいつ」

ダークラ

「味方になりたいのか。なら、どこまでもついて来い」

ザンバは味方になった。

デス

「いいのかよ、あんな得体のしれないやつ」

ダークラ

「一応、マーマンやマーメイドは魔界の存在だからな」

ザンバ

「ところで、お館様は何かをお探しで？」

ダークラ

「お館様？・・・ああ、カエル王子を探しているんだが」

ザンバ

「カエル王子なら、金の鞠を拾ってあげたのにも関わらず、ろくに感謝しなかった王女さまをストーリーカーしに行きましたが・・・？」

ダークラ

「なにっ！？早く助けに行くぞ」

ダークラは音速のごとき速さで城の門を突破した!!!!

王様

「お前は!!!!」

ダークラ

「カエルを殺して、王女を守るんだよ」

ダークラは王女の部屋へ入った!!!!

カエル王子

「お前はダークラ!!!!」

ダークラはカエル王子を掴んで、壁にたたき付けた!!!!

ダークラ

「ははは!!!!カエルがゴミのようだ!」

ところが、カエル王子はみるみるうちに人間の姿に戻った!!

王子

「あっ!元に戻った・・・!!ありがとう、ダークラ」

ダークラ

「あれ?なんで?・・・アッ!そうだ、カエルになる呪いは強い衝撃で元に戻っちゃうんだった!!」

すると、あとからデスとザンバがやって来た!!

デス

「ダークラ、やったな！」

ザンバ

「やりましたな、お館様」

王女

「カッコイイ！」

王女は王子ではなく、デスに抱き着いた。

王子

「涙目」

デス

「あ、あはは。君はフクロウナギって知ってる？」

しばらくデスを睨んでいた王子……。しかし段々と顔がエロくなり、

王子

「君、可愛い！！ブスな王女なんかより、君を娶りたい♂」

と言って抱き着いた！！これにはデスも驚いた。

デス

「な、なにっ？」

騒ぎを聞いて、王様がやって来た。

王様

「うるさいぞ、ダークラー!!」

ダークラ

「その声は、音速マン!?!」

なんと王様の正体は音速マンだった!そして、王女とはマリーだったのだ。

ダークラ

「お前、ヘルメットとると、やけにおっさん顔だなあ」

音速マン

「お前の素顔はどうなんだ?あと、そのポニーテールの少年よ、私の娘を口説くな。そして、カエルから戻った王子、娘によくもブスと言ったな」

ダークラ

「ところで、お前だれ?」

王子

「ああ、僕の名はリュウロウ。リュウハクの三男です」

ダークラ

「(心の声..父はロリで、子供はシヨタなんだな。怖い一族だ)自分の家へさっさと帰りな」

リュウロウ

「はい。ダークラに対する憎しみと、デスに対する愛は変わりませんからね☆」

デス

「お前、気持ちわりい・・・（苦）」

リュウロウはさっさと帰ってしまった。

あとでわかった話によると、カエル王子のいた池は音速マンの屋敷裏の池だったらしい。

第22話・元の姿になあれ☆（後書き）

ザンバ「お館様、もしものがあつたら、この私が何とか致しますが？海の幸が食べたい、マーメイドに会いたいといった要望なら簡単ですけど・・・」

第23話・キャラ紹介第三期（前書き）

今回は番外編のキャラの紹介もある。歴代魔王が3、4体くらい判明する。あのキャラの正体も書かれている。

第23話・キャラ紹介第三期

オメガ・・・ヘルクライム78柱のNO.1。いろいろと謎が多いキャラだったが、番外編・

「ただ未来のため」で23年後の音場未来だったことが判明。（なぜ悪魔になってしまったのか、なぜ過去にやってきたのかは謎）妻は恐らくマヤミ。そうになると、ダークラにとってデスは孫となる。ハンドブレードなる武器で相手と戦えることが判明した。多分39歳。

音場未来・・・マヤミの彼氏。ダークラの標的。マヤミと同じ16歳。ちなみに音場は“おとぼ”と読む。23年後にオメガとなるのだが、その経緯は不明。（オメガの正体として、物語ではまだ語られていない）純情な性格。父は戦と博打が大好きな作家らしい。

イリス丸・・・エルフ族の剣豪。26歳くらい。完全戦隊・キモレンジャーの一員。（ガイア丸以外の奴らの紹介はそこで語られているので、無し）天下無双を目指しているが、幼なじみのレイラに頭が上がらない。

レイラ・・・イリス丸の幼なじみのエルフ。年齢は彼と同じくらいらしい。あまり人間を信用していない。弓を使って戦うことがある。ダークエルフ・・・闇王の配下で、暗黒神を崇拝する。戦闘力はエルフより上。しかし、雑魚兵のように倒されたりする。しかし、かなりの実力を持つ者もいる。

リュウハク・・・やっと現れた三傑の一人。地球を支配するという宿命を代々背負ってきたが、自分の代は自分の覇道で地球を支配し

ようと思った。57歳。ロリコンで、14〜19歳あたりを狙う。ドラゴン属性なので、肉食なのだが、妻のリウレンのせいで草食っぽくなった。

リウロウ・・・リウハクの三男。12歳。南斗の者ではない。切り裂くよりも魔法で戦うことを得意とする。最初は音速マンの娘・マリィを狙っていたが、デスに魅了されてショタコンに目覚めた。デスと一緒に通販のバイトをした際、怪しい花の力でデスを掘ろうとした。

マリィ・・・音速マンの娘。10歳。父の行きつけのパン屋が潰れた際、

「パンがなくてもケーキがある」といって、父を励ました。音速マンの髪の色は緑色だが、マリィの髪は金髪。デスに一目惚れした。

直江兼続・・・心臓が三つある。ナオエーセットをどうしても買ってほしいみたいだ。愛の祈りを踏みにじると、ビームを放ってくるぞ！！！

ザンバ・・・池からいきなり現れたマーマン。真田みたいな槍で敵と戦う。マーメイドがどうやって呼吸しているのか気になっている。ダークラとは出会い頭に主従関係になる。21歳くらいらしい。実は人間の妻を持つ（ってことは、人妻ではなく魚妻？）そうなの。

ヘブン・・・No. 24の2児のパパ。二人の娘は現代の二喬と称されるほどの美少女（長女・ライラ、15歳と次女・セーラ、14歳）なのだが、彼の年齢は35歳と結構若い。巨大な鎌で敵を暗殺するように倒すという、見事な技を見せる。女装少年より格下なのにへこんで、人類に提供する楽園のプランを忘却した。

サイン・・・No. 35の剣の達人。巨大な剣からコロスケの使うような短剣も使いこなせる。24歳説、27歳説、30歳説がある。名前のせいか、オメガの執事をやっている。

ダイノ・・・遙かにしえに存在していた魔王。実は第1天魔王。恐竜がいたところからいたいらしい。しかし、ある場所（のちのアルプス山脈）で眠りにつき、気がついたら、スイスにいた・・・。恐竜の化石を呼び出したりする（恐竜は骨の姿で動く）“魔王☆大激戦”では信長に倒された。フランダーズを自分の手で倒し、貧民を助けようとする。

フランダーズ・・・名前の割に血も涙もない。それもそのはずで、彼は光属性の攻撃しか通用しない霊体の体を持つ。

実は第7天魔王。

弱肉強食の世を築こうとしたが、音速マンの先祖に封印された。のちに復活してダークラを倒し、第10天魔王になることを目論む。“魔王☆大激戦”では度重なる光を喰らいまくって消滅した。手を变形させて戦う。ちなみに彼に喰われた魂は成仏できずに腹に溜まったままなので、討ち取ればかなりのソウルポイントを稼げるぞ！！

アンゴラス・・・深海を牛耳る魔王。実は第8天魔王。同じ名前のキャラがいるらしいが、こちらのほうが強いと言われる。光を駆使した技を使う。歴代魔王を引退したものの、深海で魔王になっていた。大きな口でマグロや人間を食べたりする。“魔王☆大激戦”では、弱点の光る触手を引っっこ抜かれて死んだ。

マール・・・本物の第6天魔王。信長の名乗っていた第六天魔王はあくまでペンネーム。歴代魔王の中では二番目の実力を持つという（一番はダークラ）。娘にブツタを口説かせたが無意味だった。変

な衣装で、左目が潰れている、陽気なキャラに見えるが、とてつもなく冷酷無慈悲。

デス・・・トラウマで女装に走ったと思われたが、実は母に似ているという理由で女装していた。オメガの正体が音場未来だと判明したため、母は恐らくマヤミである。親子三代にわたって顔が似ているとなると、皮肉にもデスの顔はダークラから受け継がれた顔ということになる（ダークラの素顔はまだ不明）。リュウロウに掘られるが、何とか逃げ出す。

第23話・キャラ紹介第三期（後書き）

なんだか、主人公がダークラからデスになっている気がするが、ダークラの孫だし・・・。

第24話・夢のまた夢（前書き）

ダークラがついに感づき始めたっぽい。

第24話・夢のまた夢

。ダークラは悩んでいた。デスの顔が、自分の娘に似ていたから・・・

ダークラ

「まあ、この世には同じ顔の人は三人いるからな。デスの母親・・・マヤミに似てるのかな？」

ダークラはデスの母に会ってみたくなった。

その頃、ヘルクライム78柱のNO.5のドリームがある生き物を連れて、ヘブンの前に現れた。

ドリーム

「久しぶりだな。ヘブン。楽園は・・・」

ヘブン

「あれはもう諦めた・・・」

ドリーム

「ならば、一緒に・・・人間にいい夢を見せてやろう」

ヘブン

「で、そのでかい生き物はなんだ？」

ドリーム

「こいつはバクという、夢を食べる生き物だ・・・」

ヘブン

「夢を食べる？お前にとって天敵じゃないのか？」

ドリーム

「大丈夫。悪夢を喰わせて、いい夢だけを残す」

ドリームはナイトメア（黒いもやもや）を出した。すると、バクはナイトメアを食べた・・・。

ドリーム

「どうだ？」

しかし、バクはいい夢（白いもやもや）まで食べはじめた！！

ヘブン

「・・・いい夢まで喰ってるが？」

ドリーム

「埴輪のことも、夢のまた夢・・・」

ドリームはぶっ倒れた！

バク

「悪い夢、食べてあげましょうか？」

ヘブン

「いや・・・お前、無差別に・・・（苦）」

二人が馬鹿な自由研究をやっていた頃、

ダークラ

「君は母が恋しくて、女装していたのかな？」

デス

「うん。母に似ていたから……。母に会ってるような……。気がしたから」

デスは涙を浮かべた。そこで、ダークラはある提案をした。

ダークラ

「ならば、母を捜してやろうか」

ダークラはリュウハクに連絡した。

リュウハク

「なんだ？」

ダークラ

「ねえ、オメガの奥さん捜してくれね？」

リュウハク

「そうだ。ダークラよ、お前の妻子はわしが監禁した」

ダークラ

「は、はいいい！?!?」

リュウハク

「救いたいなら、誰かを送れ」

ダークラ

「……わかったよ」

ダークラは電話を切った……。

ダークラ

「だれか、リュウハクのところ行ってくれ。俺の妻子が囚われた」

デス

「ならば僕が。リュウハクから母の情報を……」

ダークラ

「リュウロウに掘られるよ？」

デス

「……ヤダ」

ザンバ

「ならば、拙者が行きましょう」

ザンバはそういうと、アメリカへ出発した。
そして、リュウハクの元に着いた。そして、運命的な出会いをするのである。

第24話・夢のまた夢（後書き）

ザンバが宿命的な出会いをする。いっぽうで、ヘブンとドリームの
極楽劇はどうなるのやら・・・？

第25話・虚無に消えた皇帝（前書き）

ラグリアスが進化します。そして、あのキャラが現れる。

第25話・虚無に消えた皇帝

リュウハクとダークラがなんだかんだしているなか、空気になっていたラグリアスは悲しみにくれていた・・・。

ラグリアス

「なんか、すんごく空気になってるよね、私だけ・・・」

ラグリアスは白鳥王女の搜索をあきらめ、神聖ラグリー帝国に帰ってきていた・・・。

てるてる

「新しく、戦力が増えましたぞ」

ラグリアス

「おっ、新人か。呼ぶがいい」

てるてる

「おっー、皇帝さよんどっぞーー。早くこー、おめー」

ラグリアス

「と、栃木なまり？」

すると、口のデカイウナギが入ってきた。

フクロウナギ

「フクロウナギ・・・です」

ラグリアス

「特技は？」

フクロウナギ

「喰う・・・です」

すると、いきなり近くに潜んでいた暗殺者を飲み込んだ！！！！

ユマ

「ぎゃああああ！」

ラグリアス

「なんだ・・・弱肉か。で、強いのか？それ？」

フクロウナギ

「一定の確率で敵を一撃で倒します。生物ならすべての存在に効きます」

ラグリアス

「つよっ！」

その時、ヘブンとドリームが現れた！！

ヘブン

「あなたに強い妖魔を差し上げましょう」

バク

「僕の夢は、この世の悪い夢を食べることです・・・」

ラグリアス

「強いのかー？」

ドリーム

「ならば、確かめましょう」

ドリームはユマを救出し、ナイトメアをかけた。

ユマ

「う・・・うん・・・シンシアさん、もうやめてゝ（涙）」

ラグリアス

「どんな夢見てんだ、こいつ」

バクはナイトメアを食べはじめた。いい夢も巻き添えで喰っているが・・・

てるてる

「こいつ・・・できる!？」

ラグリアス

「いいねえ」

すると、それに嫉妬したフクロウナギが、ラグリアスをかみ砕いた！！

ラグリアス

「ぐわあ！！体が真っ二つに！！！！」

ラグリアスの体から光の粒が流れ出した・・・。

てるてる

「ラグリアス様っ、この消滅防止箱の中に!!」

ラグリアスは箱の中に入った。体が光の粒になったが、流出はまぬがれた。

てるてる

「ラグリアス様、今からきんきゅーしゅづつ（緊急手術）すっから、たえてろーー」

てるてるはカートに箱を乗せて、走り出した。ところが!!!

ガラガラ・・・がしゃーーん!!!

カートの車輪にユマのあほ毛が絡まって、カートが倒れてしまった!

へブン

「どんな状況だよ・・・W」

消滅防止箱は壊れ、中からラグリアスの光の粒が流出した!!

てるてる

「アッー!」

しかし、光の粒は地面に落ちた状態だった・・・。

妖魔ゲドウ

「どうやら、ラグリアスさまあWの光の粒は空気より重いようですね・・・」

ドリーム

「では、さっさと回収して緊急手術をすれば・・・」

ドリームは言葉を失った・・・。

なんと！！！！バクがラグリアスの光の粒をペロリと食べてしまったのだ！！

ドリーム

「ああっ！食べちゃった！！」

てるてる

「いや、まだ口の中に・・・」

バク

「ごくっ」

バクは飲み込んだ・・・

てるてる

「・・・」

バク

「ああ☆」

へブン状態になった！

バク

「のどごし☆パラダイス！！！！」

しばらく、ユマのあほ毛の絵をお楽しみください。（小説だからないけどさ）

ドリーム

「こっちのほう放送事故・・・」

そして・・・。

てるてる

「ラグリアス様、もう歩けますぞ」

ラグリアス

「あ、ああ・・・」

ラグリアスは歩きだした。しかし、ぎこちなかった・・・。

ラグリアス

「なんか、体がムズムズするな」

ラグリアスは自分の体を触った。なんかスベスベする・・・。

てるてる

「ラグリアス様・・・すいません!!」

てるてるは土下座した。

ラグリアス

「どうしたんだ？」

てるてる

「実は・・・。ラグリアス様の肉体を完全に再生出来なかったので・・・75%くらいサイボーグにしました」

ラグリアス

「はああ！？なんじゃそりゃー」

てるてる

「敵に合わせて馬刺しモードや昆布モードになりますが・・・」

ラグリアス

「・・・」

ラグリアスはメカラグリアスに進化した！

第25話・虚無に消えた皇帝（後書き）

シンシア「カートを操作するときは、車輪にあほ毛が絡まないようにしよう！」

第26話・ダークラ軍、栃木へ行く？（前書き）

ダークラたちが栃木へ行くことになったみたいだ。理由は・・・。
ストーリーの軌道が大幅に狂いだした・・・w

第26話・ダークラ軍、栃木へ行く？

ダークラはザンバがいなくなったため、ヒマだった。そこで、ダークラはあることを提案した……。

ダークラ

「どうか、旅行へ行こうか。社内旅行」

それを聞いて、デスは喜んだ。

デス

「魂を採る仕事……嫌気が差していたんだよね。栄喜を養って、母さんに元気な姿を見せよう」

しかし、ダークラはどこへ行けばいいのか、わからなかった……。

ダークラ

「ラグリアスに聞いてみよう」

ダークラはラグリアスに電話した。

ラグリアス

「どうした、ダークラ。……なに？ オススメの場所を教えてくださいだ？」

それを聞いたテルテルが、食いついてきた！

テルテル

「そんなら、栃木がええよー」

ラグリアス

「ってわけで、栃木にしたらどうだ？」

ラグリアスは電話を切ってしまった。

ダークラ

「栃木って・・・日本か？どうだ？行ってみるか？」

ごま

「たしか、あの県って・・・海ないんだよな」

ダークラ

「カッパドキアにも海ないじゃん」

ごま

「・・・」

ダークラは、ごま、オメガ、ディステイニー、デス、そしてNO.72のビコースが行くことになった。

ビコース

「ソロモンだったら、俺のところで終わりだろうな」

ダークラ

「あと六人いるんだよな」

あーだこーだ言いつつ、栃木のとちのき林へ瞬間移動した。

ダークラ

「せっかくだから、殺生石に眠っているとされる殺神器でも探してみようかな?」

ビコーズ

「たしか・・・、殺神器は太陽神が作り出したあつてはならぬ武器。光の罪と言われている。が、一度は装備してみたいかも・・・!」?

すると、ごまが大激怒した!!

ごま

「殺神器は人類が望んだ両刃の剣だ!・・・あれのせいで、幼い子供が欲望の犠牲に・・・」

ダークラ

「ごちゃごちゃいってないで、行くぞ」

デス

「行くって・・・。宿はどうするの?」

ダークラは途方に暮れた。その時、目の前に黒い騎士が現れた。

??????

「おやおや、焚火のマキを拾いに来たら、さ迷えるものたちに出会ってしまったよ」

ダークラ

「何者だ?」

??????

「ああ、私はガイロスの三番弟子でアーサーの親友・ランスロット

です」

ディステイニー

「ランスロット・・・たしか、“死に神の幻”なる業の使い手・・・なぜ、こんな山奥に？」

ランスロット

「争いが嫌になってね。静かな山奥で宿を営業するようになったのさ。あと、アーサーのやつ、闇江って女といちゃついてるってな（涙目）」

オメガ

「では、宿へ行くか・・・」

一行は宿に着いた。

デス

「やつと着いた」

ランスロット

「オメガ、あんたの子供、男だろ？」

オメガ

「なぜ、初見で判るんです？」

ランスロット

「奴の放つ気・・・。殺気と悲しみに満ちている」

オメガ（心の声・・・そんなくらいで判るのか？）

ランスロット

「オメガ、お前の息子さん、アンタに不満を抱いている。あいつが装備できる武器によっては、お前殺される」

オメガ

「（心の声…なにいつてんだ、こいつは。私の息子はたしかに女装癖のあるマザコンだが、私に殺意など、抱いていないだろう）デス、お前は父さんをどう思う？」

デス

「殺したい☆」

オメガ

「（；）何で？」

デス

「母さんを探してくれないから」

ランスロット

「ほう、息子さんは母を想って女装してますな。もしかすると父がバカ過ぎるで、売春婦に成り兼ねませんぞ」

オメガ

「それは・・・」

ダークラ

「大体、お前にN O. 1の実力あんの？」

ディスティニー

「はつきりいって、オメガをボスと思った記憶がない」

ビコーズ

「あの・・・なんで、入った順にナンバーを振り分けずに、バラバラに振り分けるの？」

ごま

「はっきりいって、死ね!!!!」

オメガ

「うわーーーーん!!!! (大泣)」

ランスロット

「(心の声…冗談が過ぎたか・・・) ちよつとまズったかな？」

オメガはこの汚名を晴らすことは出来るのか？

第26話・ダークラ軍、栃木へ行く？（後書き）

オメガ、まさかのスーパー裏切りタイム＋我が子の殺人予告Or売春婦になるという、キツイ仕打ちを受ける。オメガはこれを払拭するため、夏の風物詩に手を出す？

第27話・鬼畜試し（前書き）

オメガが肝試しではなく、鬼畜試しをすることに。ついにあのキラが太陽神となり、暗黒神と激突する・・・？

第27話・鬼畜試し

オメガは息子や魔王、はては部下にフルボッコに言われ、へこたれていた。

その夜・・・。

デス

「父さん、どこ行くの？」

オメガ

「・・・鬼畜試しさ・・・」

オメガはそういって、宿から出ていった・・・。

その頃、強大な闇が近づきつつあった・・・。

暗黒神・デストロイア

デストロイア

「久しぶりだな。地球・・・」

デストロイアはある場所へ向かっていた・・・。

デストロイア

「この星で決着をつけよう。太陽神・ゴマーフ、我が末弟よ」

いつぼう、オメガはある生物と遭遇した。

モスマン

「あの……。鬼畜試し、一緒に行きましようか？」

オメガ

「一緒に行ってもいいが……。鬼畜試してなに？」

モスマン

「特定のスポットで心靈写真が撮れるまで帰れない、むごい肝試しです……」

オメガはそれを聞いて怖じけづいた。しかし、部下や息子に良いところを見せないと、殺されると覚悟していたため、仕方なく鬼畜試しをすることになった。

真っ暗な闇の中、いきなりモスマンが叫んだ！！

モスマン

「アッー！」

オメガ

「わっ、な、なんだ？」

モスマン

「あそこに赤いハゲが居るー！ー！！」

見ると、それはポストだった……。

オメガ

「あれは、ポスト・・・です（ゲンナリ）」

モスマン

「なんだ、脅かすなよ」

オメガ

「（心の声・・・お前が脅かさないでくれ）しかし、丸っぽいポストだな」

すると、またモスマンが叫んだ！！

モスマン

「わはー！ー」

オメガ

「ななな何だー！ー！？」

モスマン

「あそこに誰がいる」

見ると、目の前に黒い鎧を着た男がいた。

オメガ

「だれ？」

デストロイア

「いや、実はね、道に迷ってしまったんだよ」

オメガ

「ならば、私について来てください」

オメガは宿ヘデストロイアを誘導することになった……。

モスマン

「ねえ、どこ行くの？どこ行くの？ねえ、どこ行くの？どこ行くの？ねえ、どこ行くの？どこ行くの？ねえ、どこ行くの？どこ行くの？」

オメガはモスマンを無視して、宿へ帰った。……暗黒神を連れて。
その頃、ごまはまがましい闇を感じていた。

ごま

「この気は……暗黒神デストロイア……なの……か!？」

すると、パーティにも異常が!!

デス

「ぎゃああああ!!頭が引き裂かれるくらい痛い!!」

ディステイニー

「なっ……!?!体が……動か……ない」

ダークラ

「俺は何もないが……。なんだ、この闇のパワーは!?!俺を上回っている!?!」

ビコーズ

「……」

ランスロット

「お前は喋れなくなったんだな」

ごま

「叩き潰す!!」

ごまは呪文を唱えた!ごまを激しい光が包む!!

ランスロット

「まさかとは思っていたが……。本当に太陽神ゴマーフだったんだな、ごまよ」

ダークラ

「ごまが……。太陽神？」

ごまは光を放つ太陽神に変身した!!

ゴマーフ

「そこか、デストロイア!!!!」

ゴマーフは壁を突き破って、デストロイアに向かって突撃した!!!!
デストロイアはいきなり、光のようなものがぶつかってビククリした!!!!

デストロイア

「なはー!?!?!?」

オメガ

「あれ？」

デストロイアはぶつかった奴がゴマーフだと知ると、高笑いした！！

デストロイア

「ははは！！その程度か？末弟よ。お前の力では・・・」

デデーン☆

ダークエルフ

「デストロイア、アウトー。と、いかにお迎えに参りました」

デストロイアはダークエルフに連行されてしまった・・・！

デストロイア

「くそー、どうしても相手を見下すときに笑ってしまう」

オメガ

「なんだ、あれ」

ゴマーフ

「お前、よくデストロイアの闇に耐えられたな」

ゴマーフはごまに戻ると、オメガのことについて話した。

デス

「やっぱり、父さんはすごかったんだ」

デイスティニー

「強大な闇に耐えられることを知らず……。あたら、すまぬ……。すまぬう」

デイスティニーは土下座して謝った。

オメガ

「ああ・・・（心の声…デストロイア、どこ行っただ？」

その頃、デストロイアは大勢のダークエルフを引き連れた闇王と対談していた・・・。

デストロイア

「お前の迎えは強引すぎる」

闇王

「まあ、毎回のことで・・・。それより、あの儀式をやらねばなりませんぞ」

デストロイアはこの儀式でとんでもない目にあう。

第27話・鬼畜試し（後書き）

デストロイアがダークエルフの儀式を受けることに。ダークエルフ、本当に暗黒神を信仰してるのか？ ってくらい、すさまじいことになる・・・。

第28話・御前儀式：前編（前書き）

デストロイアが笑えなくなります。どう考えても、いじめ。闇王の家臣が鬼す。今回はストーリー初の前編・後編仕立てだ！！

第28話・御前儀式…前編

デストロイアは、儀式を舐めきっていた。前回は難易度を天国にしていたため、デザート100品を全て食うくらいだった。

ぶっちゃけ言うと、デストロイアは前回は恥ずいと感じていた。そこで、今回は難易度を鬼作（修羅より上）で儀式を行うことにした……。

闇王

「前の戦いで多くのダークエルフの命が奪われたため、弔いの意味も込めて儀式を行って下され」

デストロイア

「エルフもダークエルフも同じ命だというのに……。理不尽なよ、光の者よ」

デストロイアの言っていることは真に正論なのだが、ダークエルフを殺戮した奴が闇の存在（ダークラ、デス）なのを知るよしもなかった。

キプリス

「デストロイアの今回の儀式は、絶対に笑っちゃいけない夜中だぜ」

リアス

「ちよつと、デストロイア“様”でしょ！」

キプリス

「ルールは、夜中の11時から朝の7時まで、笑わなけりゃいいんだ！もしも笑ったら、キツイお仕置きが待ってるぜ！」

デストロイア

「ふっ、任せろ。大丈夫だ」

デデーン☆

デストロイア

「え？」

闇王

「さっき、“ふっ”って笑いましたね」

ザブロス

「喰らえ、ギャリング砲!!!!」

デストロイアを赤い光が襲う!!

デストロイア

「があお!!!!」

開始早々デストロイアはもうボロボロだった。

闇王

「もう、寝てもいいです」

デストロイア

「うう……。すまぬう（心の声…へへっ、寝ればこっちのもんよ☆）」

デデーン☆

デストロイア

「・・・なんで？」

闇王

「心の中で笑ったからです」

デストロイアはキプリスに頭を掴まれた！そして、

キプリス

「ふっとびな」

デストロイアは寝室に投げ飛ばされた！！

闇王

「キプリス・・・。お前、本当に魔法使い？」

キプリス

「なんだよ、魔法使いが歌舞いてちゃダメだっていうのかよ？」

闇王

「・・・いえ」

デストロイアは何とかベットに寝込んだ。

キプリス

「ここからがスーパー鬼作タイムだ！！」

デストロイアは寝静まっていた。すると、どこからともなく変な声が聞こえてきた。

甘寧

「サイコだぜー」

デストロイア

「・・・」

甘寧

「おっさん？おっさん！・・・ドドリアー！！！！（中の人繋がり）」

デストロイア

「・・・ふふ」

デデーン☆

デストロイア

「もう、いいですよ（ヤケクソ）」

グレン

「ヤケクソなんで、これを・・・」

デストロイアは巨大なへび花火に乘せられた。そして、点火した！
！すさまじい勢いでへび花火は膨らんで、天井に激突した！！
その様はへびというより、天に昇る龍のようだった・・・。

キプリス

「汚ねえ花火だねえ」

さすがにデストロイアも、これはヤバいと思い、ダークエルフに助けを求めた・・・。

デストロイア

「お前ら、信者なら私を守るのだ！」

ダークエルフ

「我々はデストロイア様のために祈ることしか出来ませぬ。デストロイア様、頑張ってください」

全てのダークエルフがデストロイアにひれ伏した！

デストロイア

「わかったよ・・・」

デストロイアはまた眠りについた。その時、恐ろしいアイツがやってきた！

?????

「らをらをを、らー」

デストロイア

「（心の声…なんだ？あのハンバーガーのピエロか？しかし、なぜ“らんらんるー☆”ではない？」

ローピエ

「ぼっくんはローピエ」

デストロイア

「ドナルドじゃねーんかよW」

デデーン☆

デストロイア

「笑ってないぞー（棒読み）」

闇王

「Wもアウトですが、なにか？」

デストロイア

「ふざけんなよ」

闇王

「おとしよ、暗黒神の顔を舐めなさい」

おとし

「ばふー」

デストロイア

「絶対にヤダ！……生理的に受け入れられない！……！キモスの極みだ！……！……！」

しかし、容赦なく顔をなめ回された！……！

デストロイア

「あゝ……！！！！！！（絶叫）」

リアス

「とてもかわいそう………おとしが……W」

デストロイア

「キモかったー……！！！！私的には鬼作モードの勇者退治よ」

りもキツイ」

キプリス

「デストロイア、謝れよ、おとろしのファンに」

デストロイア

「二億回土下座するから、助けて」

闇王

「三億円じゃなきやダメだつて」

もうやってられないので、デストロイアは3時頃に寝付いた。
しかし、ここから鬼作を超える極鬼モードに入る・・・。

第28話・御前儀式：前編（後書き）

デストロイア「別の小説では、大事に尊重されてんのに……。私は人望が薄いのかな？・・・ゴマーフと仲直りしときゃよかった（涙目）」

第29話・御前儀式..後編(前書き)

後編も鬼畜。闇の勢力からも、光の勢力からも虐げられた神ってどんな末路を遂げるんだ？

第29話・御前儀式…後編

前回のあらすじ・・・高をくくってハイレベルな儀式を選んだデストロイア。明らかにいじめとしか思えない行為に、涙目になりながらもひたすら耐えながら寝ていた・・・。

デストロイア

「おとろしに顔面の処女は取られちゃうし・・・。最悪だ」

闇王

「なに？顔面の処女って？」

闇王はバカバカしくて開いた口が塞がらなかったが、あることを思い付いた。

闇王

「あの・・・。ちょっといいところに行きましょう」

闇王はデストロイアをある場所に連れていった。そこはある湖だった・・・。

闇王

「ボーナスタイム☆ここでシジミを一匹でも採れたら、その時点で儀式は終了です」

デストロイア

「ああ。かならず採ってやる」

闇王

「では、せいぜい頑張ってください（ニヤリッ）」

デストロイアはシジミを探し始めた。三時間たっても採れなかった。そして、ついにデストロイアはカメラに向かってキレた！！

デストロイア

「なんだよ、弱者・ダークエルフどもめが！！俺は必死で儀式や
ってんだぞ！？ってか、なんなんだよ、この湖・・・シジミがトウ
ルルって頑張ったんだぞ！？！？」

デデーン☆

デストロイア

「ふざけんなよ貴様ら。ブロッコリーみてえにデデーン☆してやろ
うか？」

トン助

「ブロッコリーじゃなくて、ブロリー・・・ですっWWW」

闇王

「ぬっへっほふ、奴の鼻の穴に指を突っ込んでやっってください」

デストロイア

「あっあっあっ！ー！わかった、俺の“デデーン☆”は無しだっ
！！誰も殺さんから、そのゾンビより臭い妖怪はやめて・・・き
ゃあああっ！♀！」

デストロイアは容赦なく、鼻の穴にぬっへっほふの指を突っ込まれ
た！！！！

リアス

「近くの店でシジミ買えばよかったのよ」

デストロイアは死にかけていた。そして、理不尽すぎるジャッジにキレた。

デストロイア

「笑ってねーだろ？」

闇王

「話を噛んだから。トゥルルってなに？と、いうかボーナスタイム過ぎてんのに探し続けるとか・・・罰ゲームですな」

デストロイア

「もう、妖怪は無しだからな!!」

闇王

「安心なされよ、この罰ゲームで最期です」

デストロイアはそれを聞いて安心した。最後ではなく、最期となっていることに気づかずに・・・。

そこに現れたのは末弟の太陽神・ゴマーフだった。

デストロイア

「ご、ゴマーフ!!俺が悪かった。今、光と闇は和解するべきだ・・・」

デストロイアは土下座して謝った。すると、ごまはデストロイアをとった。

デストロイア

「すまない・・・」

すると、ゴマーフは笑いながらデストロイアを空中に放り投げた！！

ゴマーフ

「ごみどもにしか信仰されぬ兄など要らぬ！死ね！！太凰勝明弾
！！！！」

デストロイア

「があああーーーー！！ゴマーフーーーー！！！！」

デストロイアの眼はデメキンみたいに飛び出た！！そして、太陽ま
で吹き飛ばされ、太陽に飲み込まれた・・・！！

ゴマーフ

「あー、疲れたwww」

闇王

「・・・殺せとまでは言っていないが・・・」

しかし、デストロイアは死んでなかった！デストロイア心は怒りに
満ちていた・・・。

デストロイア

「許さん・・・光も・・・闇も・・・憎い・・・憎い！！！！」

新たな悪夢が始まろうとしつつ・・・ある・・・。

第29話・御前儀式…後編（後書き）

暗黒神より、太陽神のほうが悪畜な件について。光⇨正義、闇⇨悪
って観念がなんだか怪しくなってきた・・・。暗黒神；；

第30話・キャラ紹介第四期（前書き）

今回は途方もなく多い。さらに今後の話の伏線が・・・。

第30話・キャラ紹介第四期

オメガ・・・魔王や愛息、はては配下の悪魔に散々言われ、汚名挽回するために鬼畜試しをした。その際、暗黒神・デストロイアに遭遇する。他の悪魔が苦しんでいるにも関わらず、何ともないそぶりだったため、仲間や我が子に認められた（鈍感だから気づかなかったという説もある）妻と娘の救出に行かないダメ親父でもある。・・・汚名挽回がおかしい？それが何か？

リュウハク・・・空気になることを恐れ、ついにオメガの妻子だけでなく、ダークラの妻子も監禁するようになった。もしも、人類を自分の代で支配出来なかったら、それ以降の者には未来を好きなように築かせたいと思っている。

ザンバ・・・オメガとダークラの妻子を救出するべく、アメリカへ渡る。多分、関羽みたいな展開を迎える。

ドリーム・・・No.5の武将らしい。ヘブンとは友人らしい。楽園など夢のまた夢と言っているが、ヘブンとは違い、まだ夢を諦めきれしていない。年齢は不定だが、ヘブンと同年代だと言われる。武器はソードトンファア。

バク・・・動物的妖魔らしいが、見た目は実在するバクが少し大きくなって、毛皮がフサフサになった感じ。属性は夢食いなので、ドリームにとっては驚異になるはずだが・・・？悪夢も善夢も無差別に食べる。ライバルはフクロウナギ。

フクロウナギ・・・深海魚。“食う”という技は、生物なら一定の確率で即死（腹の中に入る）させる。偽フウセンウナギといわれる

ことがあるが、それではホーリーを偽タライロン（あるいは、タライロンを偽ホーリー）と言うのと同じ愚行である。

てるてる・・・ラグリアスのもとにいる、妖魔幹部の一人。生き物を改造して、サイボーグにすることに長けている。名前の通り、てるてる坊主が黒くなって、人間大になった感じの姿。栃木弁になることがあり、日本から輸入してきたレモンのかき氷を食べているところが確認されている。同僚だったゼブラスがなくなって心配していたが、プエルトリコで元気に活躍していると知ると、軍資金の一部を送金したりと、仲間思いなところも確認されている（小説では書かれていないが・・・）

妖魔ゲドウ・・・ラグリアスのところにいる妖魔幹部で、自称“妖魔界最強の戦士”らしい。名前からは想像がつかないほど、正々堂々と戦おうとする。今のところ、活躍はしていないが・・・。

メカラグリアス・・・フクロウナギに体を真っ二つにされ、光の粒をバクに食べられたりしたが、なんとかかてるてるの力で体の大部分を機械にして蘇った。前よりも戦闘力は上昇したが、本人は元の肉体を取り戻そうと思っている。

メカラグリアス・・・フクロウナギに体を真っ二つにされ、光の粒をバクに食べられたりしたが、なんとかかてるてるの力で体の大部分を機械にして蘇った。前よりも戦闘力は上昇したが、本人は元の肉体を取り戻そうと思っている。

ビコーズ・・・No.72。疾風の剣士と呼ばれる。そう呼ばれている通り、疾風の如く全てをみじん切りにするらしい。美形で女にモテるが、意外とひかえめな性格なので、まともに女性と付き合ったことがない。完全戦隊・キモレンジャーでは、それに難癖をつけ

られ・・・；；

ランスロット・・・アーサーの親友で、ガイロスの三番弟子。“死に神ランスロット”と呼ばれる。その名の通り、死に神の幻という属性を持つ。真っ黒なスーツを着ていて、顔をヘルメットで隠している。年齢はアーサーと同じくらい？らしい。栃木の栃の木森の奥で宿を運営していた。

モスマン・・・UMAでへたれ。

目がデカイ。

倒れると起き上がれない。

現地では猛スピードで逃げる車を追い掛ける（実は、迷子になってしまい、ついに行けば町に辿り着けると思って、必死で追い掛けたらしい）という事件を起こしてしまい、ドミニカ共和国に移り住んだ。

そして、隣のプエルトリコのゼブラスの所まで遊びに来ては、とてもない騒動を起こす。実は、町おこしや本などで取り上げられ、印税がかなり入ってくるため、超がつくほど大金持ち（ネッシーやツチノコもこれに入る）本気になると、ムキムキのマツチヨになって、かっこよくなる。変態丸とは心の友。

ゴマーフ・・・太陽神。ごまの本来の姿。ごまの話によると自分とそっくりな名前がゴマファザラシだったからアザラシの姿に成り済ましていたとのこと。太鳳勝明弾という大技をぶちかましたりする。兄のデストロイアとはなにかあったのか、かなり嫌っている。

デストロイア・・・暗黒神で、ダークエルフに崇拝されている（そのため、ゴマーフはエルフに崇拝されている）らしい。地球に舞い降りるたびに何かの儀式を行う（ここで初めて、難易度の存在が明らかにされた）のだが、非常に凄まじい儀式になったため、ゴマー

フと和解しようとしたが、太陽まで吹き飛ばされた。そのため、心は怒りと憎しみ囚われ・・・。

キプリス・・・闇王の重臣らしい。天下無双の魔法使い。魔法使い
Ⅱ非力を払拭するかのような豪快な攻撃力を持ち、ド派手な攻撃技
や魔法を繰り出す。ちなみにキプリスとはさざ波という意味らしい
が？

リアス・・・闇王の重臣。女のダークエルフで、何かとキツイ性格。
キプリスの強さに心底惚れていたり・・・する？

ザブロス・・・闇王の重臣。ギャリング砲という技を使ったりする。
今は空気。今はね・・・？

グレン・・・闇王の重臣。花火で相手と戦うという、不良少年っぽい
りを発揮するが、顔は女の子っぽいとリアスによくいじられる。

ローピエ・・・闇王の重臣。実は重臣の中で最も優秀。ペニーワイ
ズやドナルドの隣に並ぼうと必死である。パクリではないと本人は
言っている。

トン助・・・ミニブタ。ツツコミ役といわれている。一応、闇王の
重臣。共和制だから・・・ではないでしょうか？親戚にフョードル・
カラマーゾフとやらがいる。

おとろし・・・日本の妖怪。これでも重臣。牙の生えた髪の毛みた
いな容貌から、トラウマになるキャラも多い。さらに顔をなめ回さ
れたら・・・。

ぬっへっほふ・・・日本の妖怪。実は重臣。肉に人の顔が描かれた

ような顔をしている。こいつもトラウマになりかねない。さらに異臭を放つ体で抱き着かれたり、鼻に指を突っ込まれたら・・・。

第30話・キャラ紹介第四期（後書き）

もしかしたら、番外編でモスマンの話や、おとろしとぬっへっほふの話、闇王四天王やっちゃうかも・・・？

第31話・漫画家プラン（前書き）

モスマンが無謀な挑戦に挑んでしまったようです。

第31話・漫画家プラン

デストロイアがいなくなり、皆が寝静まった頃、ビコーズのケータイが鳴った。

見ると、送ってきたのはモスマンだった。

ビコーズ

「なに・・・？『漫画家になりたい。しかし、唐突にやってもあれなので、プランを送った』だと？」

隣で寝ていたデイスティニーが起き出した。

デイスティニー

「おっ、誰から送られて来たんだ？」

ビコーズ

「なんか、モスマンが漫画家になりたいから、自分の考えを聞いてほしいみたいだ」

デイスティニー

「あいつ、印税とか入りまくって超大金持ちなんだろう？まあいいや。何が書いてあるんだ？」

ビコーズ

「主人公の名前は焼鳥の名前だな」

デイスティニー

「俺、焼鳥の名前のキャラを二人くらい知っているが・・・」

ビコーズ

「主人公の名前は・・・かわ（笑）」

デイスティニー

「え？かわ？水系の川じゃなくて皮串の皮？」

ビコーズ

「・・・はい。理由は皮串が好きだかららしい」

デイスティニー

「そんな人間味ない名前をつけられるなんて、“かわ”いそう・・・」

ビコーズ

「で、ヒロインは・・・人間じゃないな」

デイスティニー

「あいつは、エロいから金髪で巨乳な悪魔とかだろうな。俺の姉さんみたいに」

ビコーズ

「で、名前は・・・おとろし？」

デイスティニー

「はいいい！？おとろしって、子供がトラウマになる妖怪のベスト5に入るようなやつじゃん！！」

ビコーズ

「そんなにひどいの？かわの顔はどうだ？」

デイスティニー

「顔写真あるんだ。どれどれ？・・・なんか可愛いし。かわつていうより、スマイレって顔だぞ？」

ビコーズ

「うーん、でもデスくんの顔のほうが魅力あるよな」

デイスティニー

「ならば寝てるところを撮影しよう。夜中で暗いからフラッシュを忘れずにな」

デイスティニーはデスのいる部屋に入った。なんと、デスはダークラの抱きまくらにされていた！！

デイスティニー

「ダークラ、うらやま・・・いや、今は撮影せねば」

デイスティニーはダークラをどこそうと頑張った。しかし、めんどくさくなったので、仕方なくくつついたまま撮影することに。

デイスティニー

「本当に可愛い寝顔だなw」

デイスティニーは自分の部屋に戻って、ビコーズに見せた。

ビコーズ

「たしかに可愛いな。でも、アゴのラインがおかしくないか？髪も白っぽく見えるし。男っぽい肌だし」

デイスティニー

「肌は・・・一応デスもゝだからな。髪も光の反射のせいだろ。夜中に撮ったんだから、画質悪くても仕方ないだろ・・・」

ビコーズ

「あ、そうそう。モスマンは腕がないよね？」

デイスティニー

「そういやそうだな。あいつ、どうやって描くつもりだ？」

ビコーズ

「口でくわえて描くらしい。“人間が出来るなら、俺も出来る”だってさ」

デイスティニー

「そうか。じゃあ、デスの寝顔と一緒にアドバイスを送るぞ」

デイスティニーはモスマンにメールを送信した。

モスマンはそれを見た。

モスマン

「なに、アドバイスは二言？名前の本で、名前を調べて、何とかしろ・・・？わかった。顔写真もなんか、可愛い寝顔・・・いや、美形だけど、おっさんじゃなかこいつ!!」

その頃ダークラは・・・。冷や汗をかいていた。

ダークラ

「あぶねー。トイレで起きるときに気づいてよかったー。もしも、このまま朝になってたら、俺は・・・。しかし、何で脱げたんだろう、俺の覆面・・・」

また、宿は静寂に還った・・・。

第31話・漫画家プラン（後書き）

娘は父に似て、息子は母に似るものなんだなあ。

第32話・運命のディステイニー（前書き）

今回はまともにストーリーが進展。そして、運命的な出会いが・・・。
そして、謎のキャラが？

第32話・運命のデイスティニー

ダークラ達が旅行しているとは知らず、たった一人で・・・いや一匹か？まあ、そんなこんなでアメリカのリユウ城に着いたザンバは・・・。

ザンバ

「ここに、お館様の妻子とオメガの妻子が・・・」

すると、門から隻眼のレプティリアンが現れた。

リユウザン

「お前がダークラの所から来た奴か。俺の名はリユウザンだ」

ザンバ

「なんか・・・妊婦には避けられそうな名前だね」

リユウザン

「ああ。内心自分も気にしているが・・・。父母から貰ったものだ。たとえ、変な名前でも潰れた眼でも・・・。捨てるわけにはいかん」

ザンバ

「お館様の妻子とオメガの妻子を帰してください」

リユウザン

「まあ、せっかくここまで来たんだから、ハクレンに顔見せてやれよ」

ザンバ

「（心の声…あれ？ハクレンって誰？そんなやついたっけ？…？）」

ザンバはリュウザンによって奥の部屋に招かれた。そこにいたのはリュウハクだった。

リュウハク

「会いたかったぞ、ザン・バサラよ」

ザンバ

「ああ、もしかしてハクレンってリュウハクの…」

リュウハク

「二人の妻子は丁重に持て成してしるから安心しろ。それよりザンバ…ザン家の長男よ」

ザンバ

「ザン家の…長男？」

ザンバの口は、ペリカンのようにふさがらなかった…。

リュウハク

「まあ、この話はあとで話そう」

ザンバ

「それより、早く人質を帰してくれませぬか？」

リュウハク

「人質とは、人聞きの悪い…」

ザンバ

「お互い人じゃないしね（ボソッ）」

リュウハク

「……。おぬし、わしの所に就かぬか？」

ザンバ

「いえ、私はお館様オンリーなので」

????

「なあ、ここはリュウハクの所に一時的についたらどうだ？」

ザンバ

「誰だ、お前は……。？」

そこに現れたのは、アマゾン川から流れてきた桃から生まれたという妖魔・ゾルバだった。

彼の強さは南米でトップクラスだった。ゾルバが来るぞというと、ピラニアは人を食うのをピタリと止めると言われるほどだった。

それを見込んだリュウハクに雇われ、様々な戦いで活躍していたのだった。

ザンバ

「なんか、運命的なものを感じる」

ゾルバ

「俺もお前から何かを感じるよ」

ザンバ

「リュウハク、ちょっとした間だけここにいてやるよ。これも運命なんだな」

リュウハク

「そうか。ならばいるがよい。・・・できればずっと居てほしいが・・・」

こうしてザンバは“一時的に”リュウハクの元になった。

一方、世界中で怪しい噂が飛び交っていた。世界各国を“切り裂きジャック”が行き交っているという噂が。彼は黒いマントを羽織り、頭には陣笠を被っているというなんとも和風じみた格好だという。なぜ、そんな奴が切り裂きジャックと呼ばれるのか?・・・彼は背中に巨大な包丁を背負っていて、見事な包丁さばきを見せるという。

その包丁さばきは、死んだはずのあの男に似ていた。・・・裁木英次郎に・・・。

第32話・運命のデイスティニー（後書き）

そろそろ、名族の妖魔王が出現間近！？

第33話・デスの自由研究（前書き）

今回は「呪われし一族」に繋がる重大な事件が起こる。そして、
1 クラの素顔が？

第33話・デスの自由研究

ザンバがリュウハクに雇われていたころ、デスは自由研究をやるう
と思った。

デス

「ダークラ、僕・・・自由研究がやりたいんだけど、やってもいい
？」

ダークラ

「やれば？夏休みだし、悪魔は人知を越える知能を持ってるけど、
たまには勉強して頭をほぐさなければな」

ダークラはそういつて笑った。しかし、ダークラは考えてなかった。
人知を越える頭脳の生物の実験がどれほどヤバいかを・・・。
実は、他の悪魔も夏休みの宿題（？）をやっていた・・・。

デイスティニー

「ダークラ様、図画工作できましたー！！！！」

ダークラ

「なに、三分でよく出来たな」

見ると、それ竹串に洗濯バサミがくっついたものだった・・・。

ダークラ

「なんだ、これ？」

デイスティニー

「これを使えば、ロケットを発射出来るんですよ！」

ダークラ

「おゝ、すげえなゝ。（心の声…こんな貧弱なアイテムにどれ程のパワーや魔力が！？）」

ふと、前方を見ると、巨大なロケットがあった。それと、No. 9のサーチャーもいた。

サーチャー

「ダークラ様、お久しぶりです」

ダークラ

「お前、見かけないと思ったら、そんなの作ってたのか・・・」

サーチャー

「これ、弾道ミサイルなんです。小生のハイパーコンピュータ並の頭脳でこれ进行操作できるんです」

ダークラ

「そりゃ、すごいな」

サーチャー

「馬鹿馬鹿しいんですけど正直、ディステイニーのおかげで燃料をケチれるので・・・うっしっしなんですよね」

ディステイニー

「そんじゃあ、飛ばすぜ！うおりゃー！！！！」

ディステイニーは何度も洗濯バサミを弾いた！しかし、何も起きな

かった！

サーチャー

「期待したんだけど正直、君の頭脳はこの弾道ミサイルに搭載されているプログラムの5分の1くらいの知能しか在りませんね・・・」

ディスティニー

「がへっ!？」

すると、No. 2のクエスチョンが現れた。

クエスチョン

「ダークラ様、フツメンの少女と超美形の女装少年とではどちらがいいかを聞いたところ、超美形の女装少年のが圧倒でした」

ダークラ

「で、調査対象は？」

クエスチョン

「シヨタオタです！」

ダークラ

「それじゃあ、当然の結果というものだ・・・」

クエスチョン

「ちなみにフツメンの少女Ⅱ花沢さん、女装少年Ⅱカツオくんですやってみました!!」

ダークラ

「花沢さん、フツメンなのか、そうなのか・・・。カツオくん、女

装好きだったのはマジだったんか・・・」

ダークラは、女装少年のデスを思い出した。そして、どんな自由研究をやっているのか、気になった。

ダークラ

「デスは何やってんだ？」

ダークラはデスの部屋を開けた！

ダークラ

「何やってんのかなー？（笑）」

すると、デスは机でぐったりしていた・・・。

ダークラ

「大丈夫か・・・？」

デス

「だ、だいじょふだおう？ぼふ、なひもひてなひほー☆☆」

デスの手元には黒い薬みたいなものが見える。

ダークラ

「お前、元気な姿で母に逢いたくなかったのかよ!？」

デス

「はひ？おかーひゃんなんか、しらはい・・・。ぼふのこほがひんはいなほ？そへだっはら、かほをちかふけて・・・ぼふのかほをみへよ・・・」

見ると、デスの眼にはうつすらと涙が・・・。

ダークラ

「可哀相に・・・ダークヒーリングで治してやるよ」

ダークラが顔を近づけた・・・。

その時！！！！

デス

「かかったな！！」

ダークラは変な黒い薬を飲まされた！！

ダークラ

「ぬっ、飲み込んでしまった！！」

デス、まさか俺を道連れに・・・！？」

デス

「僕が薬物に手を出すとしても、思っていたのか！？（ブロリー風に」

ダークラ

「では、貴様が飲ませたのは何だ？味は正露丸っぽいが！？」

デス

「ダークラが飲んだのは、怒り・憎しみを解き放つ努発玉さ☆

あ、努発玉はダークヒーリングじゃ元に戻らないからね（はあと」

デスはそう言うと、微笑みながらウィンクした！

ダークラ

「キモッ!! なんだよ、お前e・・・」

ダークラは突然俯いた!

デス

「キタコレ!!」

すると、ダークラは何かをつぶやきながら覆面を外し始めた・・・。

ダークラ

「優しさの力で抑えた怒り・・・。平穏な心で封印していた憎しみ・・・。

すべてを解き放って・・・。俺を呪った一族・・・血祭りにして、バラバラに引き裂いてやる!!!!」

ダークラは闇に包まれた!!。そして、ダークラはついに素顔を見せた!!!!

デス

「か、母さんの顔に似てる・・・!?!」

ダークラの素顔は白くて長い髪、眼のつり具合、あごのライン以外はマヤミにそっくりだった。いや、マヤミがダークラの顔にそっくりといえるだろう。

ダークラは闇をどんどん吸収した!。ダークラの服は、闇の力で暗黒の鎧と化した!。そして、ダークラは漆黒の闇から魔剣・ミナゴロシを取り出した。

もはや、そこにいたのは優しくて物ぐさなダークラではなかった・・・。憎しみに囚われた美形の魔王、ダークネス・ダークラとなって

いた！！！

ダークネス・ダークラ

「リヴォードンとその一族、ことごとく闇に墮とす！！！！！！」

ダークネス・ダークラはそういうと、城の天井を吹き飛ばしてどこかへ行ってしまった・・・。

デス

「僕のせいだ・・・どうしよう。」

うわあああん！ふええええん！！いやあああん！！！！」

デスは泣き叫んだ！

他の悪魔達も危機感を感じていた・・・。

ディステイニー

「ダークラ様を止めねば・・・」

サーチャー

「弾道ミサイルよ、ダークラ様を追撃し、撃ち落とせ！！」

弾道ミサイルは、ダークネス・ダークラを追撃した！しかし・・・

ダークネス・ダークラ

「こんなミサイルで、俺は殺せぬ！！！！」

ダークネス・ダークラは弾道ミサイルをダークブレスで吹き飛ばした！！

クエスチョン

「まずいことになっちまったな」

このあと、ダークネス・ダークラは消息を絶つ……。呪いが解けるまで。

第33話・デスの自由研究（後書き）

第9天魔王、おそらく「呪われし一族」が完結するまで更新しないか、他キャラが活躍すると思います。ザンバのエピソードが大体をしめるかな？

第34話・繋がったお転婆（前書き）

今回はちょっと長い（これが普通の長さなのか？）です。謎の女の子がメインになってるかも（目立っているかも）しれない。

第34話・繋がったお転婆

ダークラは、日本で平穏な日々を送っている“呪われし一族”を殺害するために大暴れしていた。

その情報はアメリカにも届いていた。

リュウハク

「ザンバよ……。おぬしの主が日本で暴れておるそうだ」

ザンバ

「何、お館様が日本で大暴れ！？……今すぐ止めねば……」

リュウハク

「いかん。おぬしの力では今のダークラには勝てぬ。この状況では、伝説の超勇者がダークラを打ち取って止めてくれるか、ダークラが復讐を果たして元に戻るのを待つしかないな……」

ザンバは心配した。もしも、前者のパターンだったら……。しかし、ザンバは気になった。伝説の超勇者とは何者なのかを……。

ザンバ

「伝説の超勇者とは、何者なんですか？」

リュウハク

「マヤの伝承によると、千年に一度生まれる最強クラスの勇者らしい。しかし、その強さは凄まじく……。

マヤの者達の間では、太陽神の作り出した、光の罪の一つと言われているらしい」

ザンバはそれを聞くと、ゾルバと一緒に伝説の超勇者を調べることにした。

ゾルバ

「伝説の超勇者って、アーサーじゃないのか？」

ザンバ

「あんなヤムチャと同レベルのヘタレが、伝説の超勇者な訳無いだろーが」

その時、小さい女の子がぶつかってきた！

???????

「きゃあっ！」

ザンバ

「何だ？」

???????

「もう、そんな所に立ってないでよ。邪魔だよ」

ゾルバ

「か、可愛い顔して……。何と言うキツイ一言……。ってか、ぶつかってきたお前が悪いんじゃない？」

???????

「いい大人のくせして、子供に逆恨みなんて、大人気ないよ。でも、あんたらがコンビを組んだら、大人気になるかも知れないけどさ。あっかんべー☆（笑）」

ゾルバ

「この、ちび！小娘！！少女！！！！ロリ！！！！」

ゾルバが今にも女兒を殴りそうになったので、ザンバはなだめた。

ザンバ

「あんな子供は捨て置いて、さっさと図書室行くぞ」

ゾルバ

「うぐう……。やい、ちび！後でお前の親父ぶん殴ってやる！！」

????????

「あたしのパパ強いもん」

謎の女兒を捨て置いて、ザンバとゾルバは図書室に行った。

その頃、ダークラの元妻のマキはリュウハクの妻・リュウレンと長話していた……。

リュウレン

「最近、世の中物騒ですわね。昨日も幻魔と妖魔がねるねるをめぐって争ったって言うし。

そういえば、マキさんの旦那のダークラさんが日本で大暴れしてるって聞きましたわよ」

マキ

「うちの旦那、いつもぐうたらしていたから、あれくらい動いてくれると、私も妻として清々しいわ」

リュウレン

「いいですわね。うちの粗大ごみもかなり動いてくれればね」

マヤミ

「なんかさ、私のよくわからないことばかり言ってるけど・・・粗大ごみって動くの？」

マキ

「あなたも結婚すればわかるわ」

その時、さっきの女の子がやって来て、こう叫んだ・・・!

?????????

「あたしのママも、パパのこと粗大ごみって言うことあるよぉー
ー! (笑)」

すると、マキとリュウレンはおばちゃんみたいな笑い声を発した!

マキ・リュウレン

「あっははははははははは!」

マヤミはその女の子に親しげに問い掛けた。

マヤミ

「ねえ、お名前は何て言うの？」

?????????

「あたしの名前はフォーミュラー!」

マヤミ

「へえ、フォーミュラーって言うんだ(心の声..変な名前ね。ネ

ーミングセンスがないっていうか……。でも、人名でココアとか、アナコンダっていうのがあるみたいだし……。フォーミュラーとか、ありがちなのかも)」

名前に疑問を感じつつ、マヤミはさらに質問した。

マヤミ

「で、何歳なの？」

フォーミュラー

「7歳だよ！」

マヤミ

「ふーん、7歳なんだ。可愛い盛りだね（心の声…7歳ってことは、7年前になるよねえ〜？ってことは変な名前流行ってないじゃん！他人事なのになぜか恥ずかしい……）」

マヤミが顔を赤らめていると、今度はフォーミュラーが問い詰めてきた。

フォーミュラー

「ねえ、おばさんはなんて名前なの？」

マヤミ

「ああ……。あそこにいるのは、私のママのマキ。44歳。んで、その隣にいる人がリュウハクの奥さんのリュウレンさん。53歳よ」

フォーミュラー

「あんた馬鹿あ？おばさんってあんたのことだけど？」

すると、マヤミは恐ろしい形相になった！

マヤミ

「くだばりたいか、ガキい！？死にたくなきゃ、風呂に入って『だるまさんがころんだ』って叫べ！！そしたら、鎌で切り刻んでやらあ！！！！」

リュウレン

「ま、マヤミさん！？」

マキ

「死ぬのはマヤミのほうよ。そんな小さい女の子をいじめて」

しかし、フォーミュラーは全く動じていなかった。

むしろ、マヤミの顔を見て、こう言い放った！

フォーミュラー

「お姉ちゃん、あたしのママに顔が似てる〜！」

マヤミ

「似てる？アンタのママは、怖い顔なの？」

フォーミュラー

「ううん、綺麗な顔だよ」

と、何だかんだ言っていた時、長い黒髪の女性がやって来た！

????

「こら！フォーミュラー！！なに勝手にうろちよろしてるの！？」

フォーミュラー

「だってこのババアが・・・」

???

「この人はババアじゃなくてお姉さんでしょ！後ろの二人をババアっていうのよ」

マヤミはア然としていた。が、勇気を出してこう言った・・・。

マヤミ

「あの・・・一体、誰ですか？」

???

「私の名前はデルタ。オメガの妻よ」

マヤミ

「オメガの妻？・・・あなたたちも人質なんですか？」

デルタ

「まっ、人質というよりも居候ってところよ！・・・あなたと私、何だか似たものを感じるわ」

マヤミ

「私に・・・似ている？」

マヤミはただならぬ運命を感じた・・・。

第34話・繋がったお転婆（後書き）

ダークラの暴れっぷりは、“呪われし一族”で書く予定！？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4608h/>

第9天魔王

2010年10月17日02時41分発行